

1 章 歴史的風致形成の背景

1. 自然的環境

(1) 位置

本市は、福島県の西部、会津盆地の東南にあり、東京から約 300km、県庁所在地である福島市から約 100km の距離に位置します。東は猪苗代湖を境とし、南は布引山・大戸岳を境とした諸山岳が壁をなし、西は会津平坦部を縦断する宮川を境とし、北は日橋川を境としています。北は、喜多方市、磐梯町、湯川村、西は会津坂下町、会津美里町、南は下郷町、天栄村、東は猪苗代町、郡山市と接し、会津地方の中核都市としての役割を担っています。

本市の市域面積は 382.99 k㎡であり、東西に 20.5 km、南北に 28.9 km、海拔は 218.32m であり、東西に短く、南北に長い地形で、東から西へ緩やかな傾斜をなし、市域の北西部に中心市街地が形成されています。

位置及び地勢

位置	東端東経 140° 06' 48"	東西	約 20.5 km
	西端東経 139° 50' 20"		
	南端北緯 37° 19' 22"	南北	約 28.9 km
	北端北緯 37° 34' 59"		

(出典：会津若松市勢統計データ)

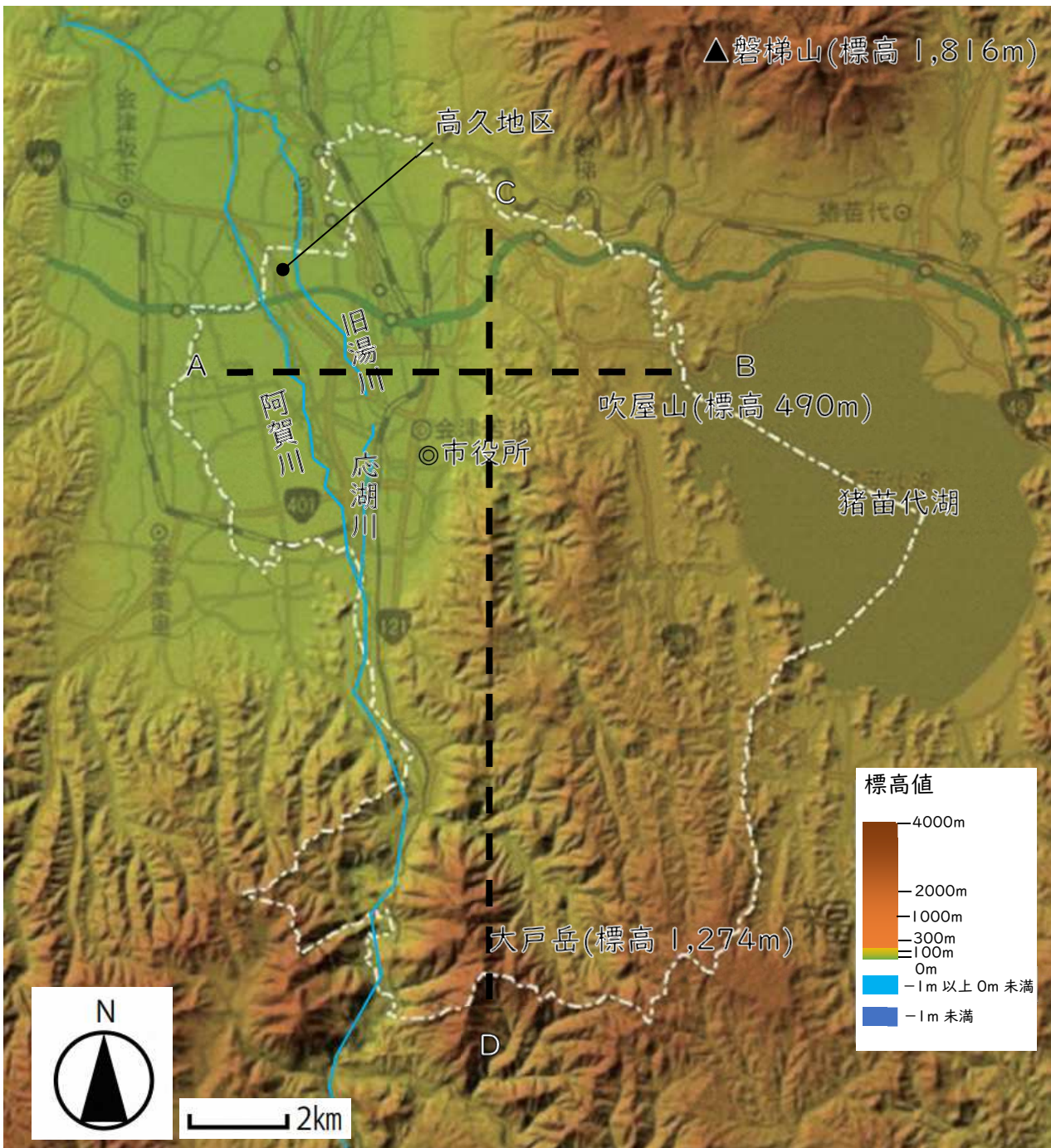


位置

(2) 地形

本市周辺の治水地形分類図によると、市街地部は台地に位置し、市街地と阿賀川に挟まれた地域は扇状地となっています。

湯川放水路の南側に位置する普通河川応湖川は旧河道となる地形にあり、市北部の高久地区周辺にも、旧河道の地形と旧湯川沿いに氾濫平野に分類される地形が位置しています。また、氾濫平野は、過去の河川氾濫により運搬された土砂が堆積しており、水は浸透しやすい地形ですが、旧河道は過去の流路であり、水が浸透しにくい特性があります。市街地が形成される市域の北西部は、阿賀川沿の標高が低く、降雨が集積しやすい地形特性となっています。



地形図

(出典：標高区分図 (国土地理院一部加筆))



標高差(東西 A-B 断面)



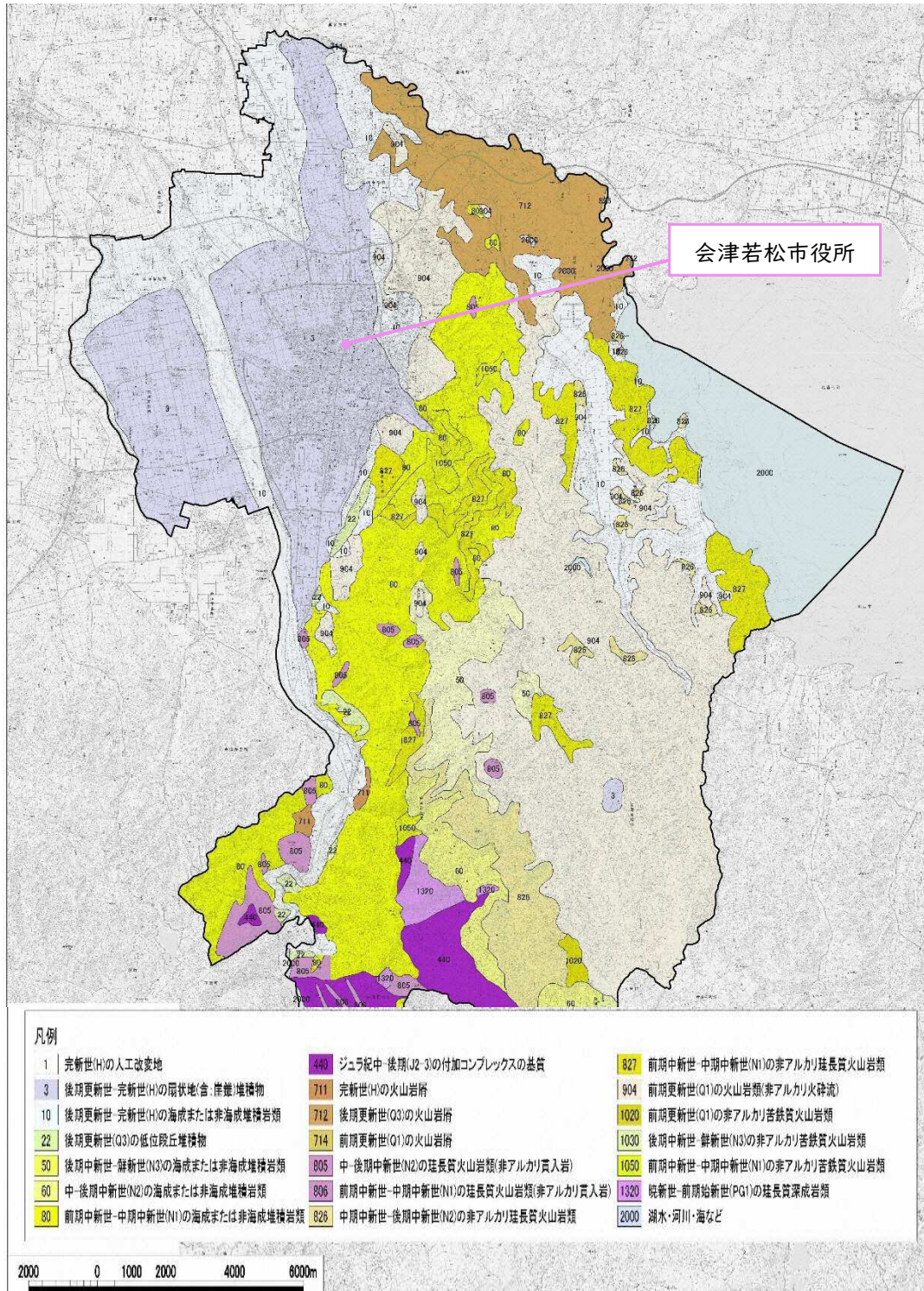
標高差(南北 C-D 断面)

(3) 地質

本市の地質は、主に石英安山岩で沖積層から成っています。

市域北部の阿賀川沿いには扇状地における堆積土が広がり、阿賀川と山地に挟まれた区域は非海成堆積岩で覆われ、山地においては火山岩類が分布しています。土は焼き物に適していると言われ、奈良・平安時代から須恵器や陶器の焼成が行われました。

市街地周辺の低平地全般においては、扇状地や山麓堆積地等、水の浸透しやすい地質です。



地質図

(出典：会津若松市総合治水計画)

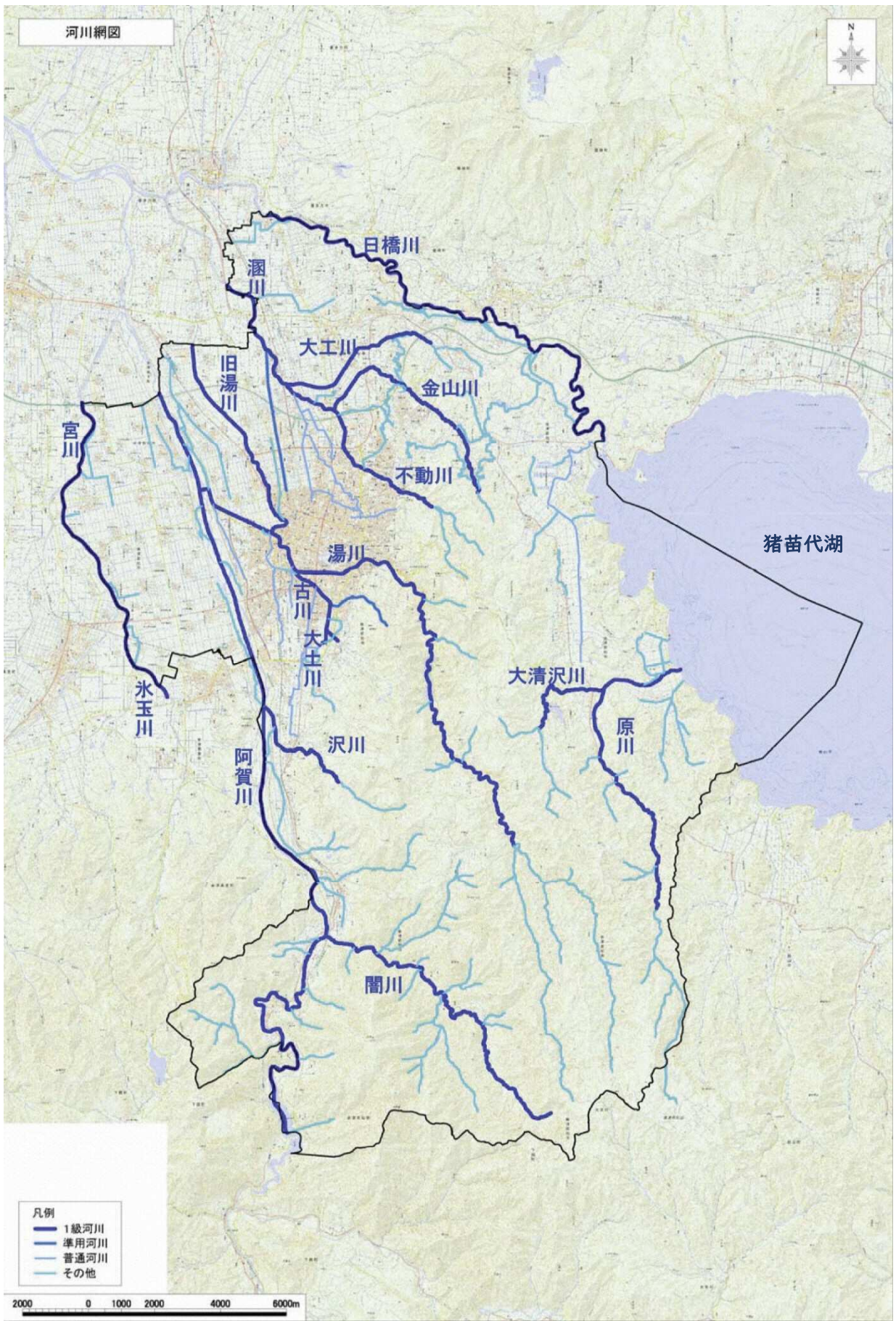
(4) 水系

越後山脈や飯豊山地、奥会津地方の多量な降雪は、その雪解け水が地下に浸透し、会津地方の豊かな湧水の源になるとともに、阿賀川や猪苗代湖など河川や湖沼に豊かな水量をもたらしています。本市が含まれる会津地域は、多くの川が集まり、豊かな河川水と地下水（地下の水がめ）を有しています。

福島県のほぼ中央にある猪苗代湖は、わが国第4位の面積を持ち、湖水面標高が会津盆地や郡山盆地よりも約300m高い所にあり、また、水質が良好であることから、堰などの水利施設によって会津地方等に導水され、大きな恵みを与えています。

また、本市は阿賀川下流圏域として13河川、猪苗代湖圏域として4河川を有しています。市の中心部付近を流れる湯川と不動川は、市域の西部を流れる阿賀川に合流します。かつて、湯川の分流として市の中心部を流れていた車川は、外濠や庭園の用水、鯉の養殖など市街地の発展に寄与してきました。他に市街地を取り巻く水田地帯の灌漑用水路として、戸ノ口堰、日橋堰、門田堰があり、古来より水路網が発達し多様な水利用がなされていました。戸ノ口堰の灌漑取水開始は古く、元和9年(1623)に領主蒲生忠郷の時代に始まり、元禄6年(1693)に不動川を横断して若松町中まで水路を伸ばし、灌漑用水及び城下町の用水として利用されていました。日橋堰は、日橋川の東電第二発電所下流部で取水し、市北部の河東町区域の灌漑用水として利用されています。また、門田堰は、阿賀川の馬越頭首工（用水を取り入れる施設）より取水し、阿賀川右岸の灌漑用水に利用されています。

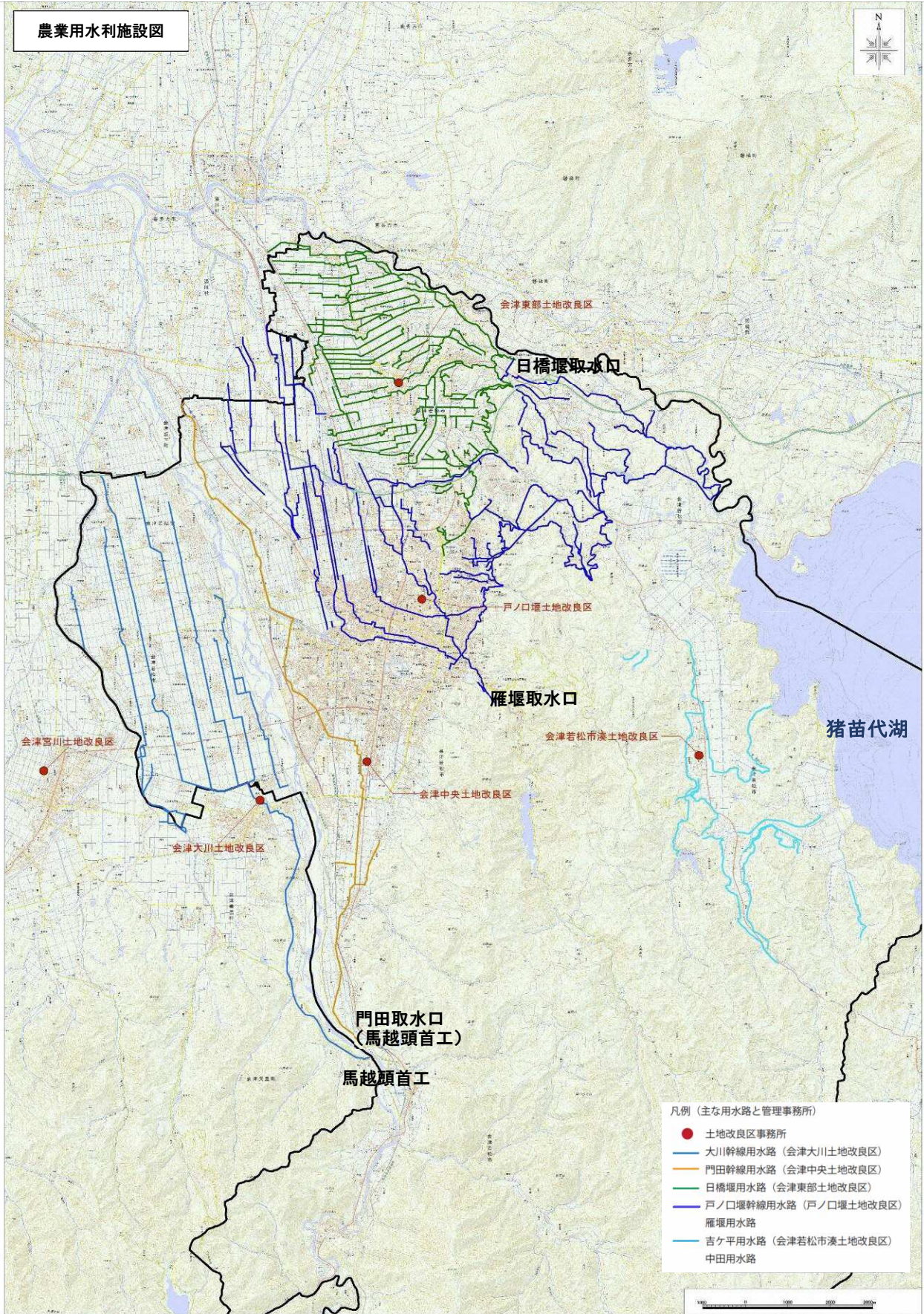
地下水は、かつて会津地方で福島県全体のおよそ3分の1を利用するほどの消費量で、一般家庭用に始まり、農業、酒造業、みそ醤油醸造業など幅広い分野に欠かせないものであり、本市の産業を支える源でもありました。



河川網図

(出典：会津若松市総合治水計画)

農業水利施設図



農業水利施設図

(出典：会津若松市総合治水計画)

(5) 気候

本市の気候は、内陸盆地特有の複雑な様相を示し、冬期は日本海側の気候となり好天が少なく降雪量が多く、夏期は太平洋側に近い気候を示すものの、春秋にはこれに内陸型の気候条件が加わり、日中と夜間の気温差が激しくなっています。また、年間の平均気温は、年々緩やかな上昇傾向を示しています。

平年^{※1}の最高気温（8月）は25.0℃、最低気温（1月）は-0.6℃、年間降水量は1,213.3mmです。11月から4月にかけて降雪があり、年間降雪量の平年値^{※2}は473cmです。

※1：平年値は昭和56年(1981)～平成22年(2010)までの30年間の平均

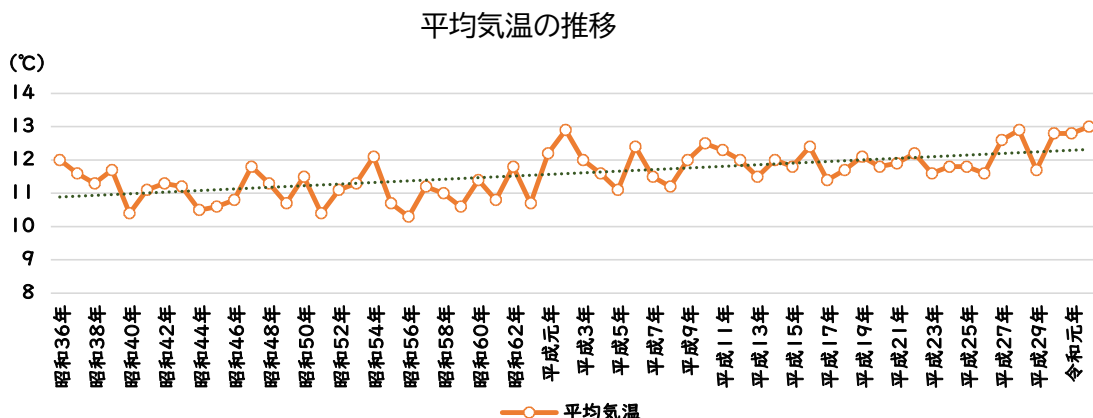
※2：「降雪の深さ」の観測値及び平年値は積雪計による値で、昭和56年(1981)～平成22年(2010)までの各年の寒候期（前年の秋から当年の春頃に至る期間）の30年間の平均



(出典：会津若松市勢統計データ)



(出典：会津若松市勢統計データ)



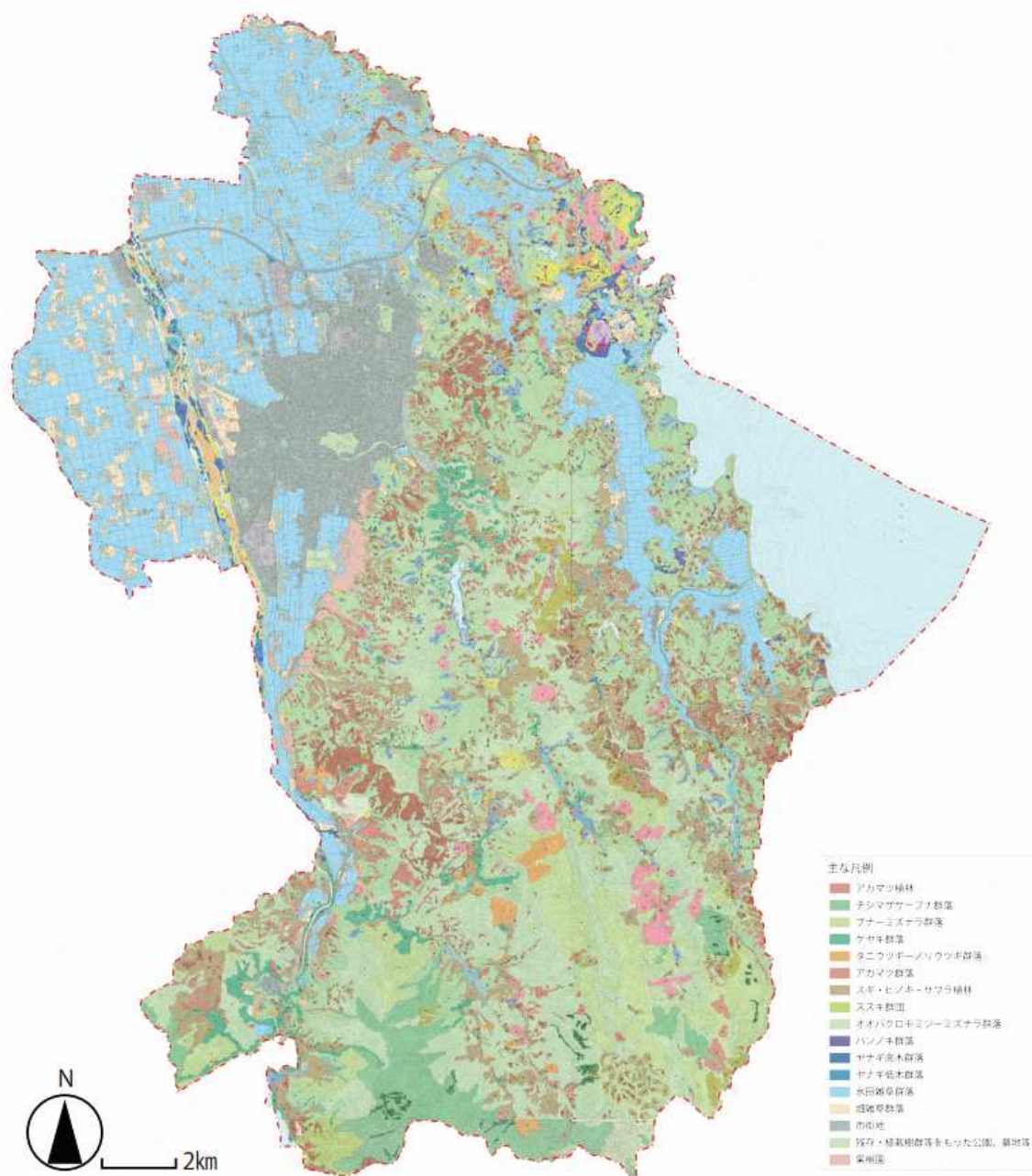
(出典：気象庁)

(6) 生態系

本市の植生は、一部アカマツなどの常緑針葉樹がありますが、多くはブナ、ミズナラ、コナラ、クリなどの落葉広葉樹林であり、自然度の高い山林が多く残されています。

また、国の天然記念物である赤井谷地沼野植物群落^{あかいやちしやうやしよくがつかんらく}では、亜寒帯植物であるホロムイチゴなどの貴重な植物が自生しています。

平成13年度(2001)からの野生生物の分布調査や文献調査の結果、市内には、国の特別天然記念物のニホンカモシカや天然記念物のヤマネ、絶滅危惧種に指定されているウケクチウグイなど、およそ2,700種の動植物の生息が確認されています。



植生図

(出典：環境省自然環境局 1/2.5万現存植生図
(平成11年(1999)～整備))

2. 社会的環境

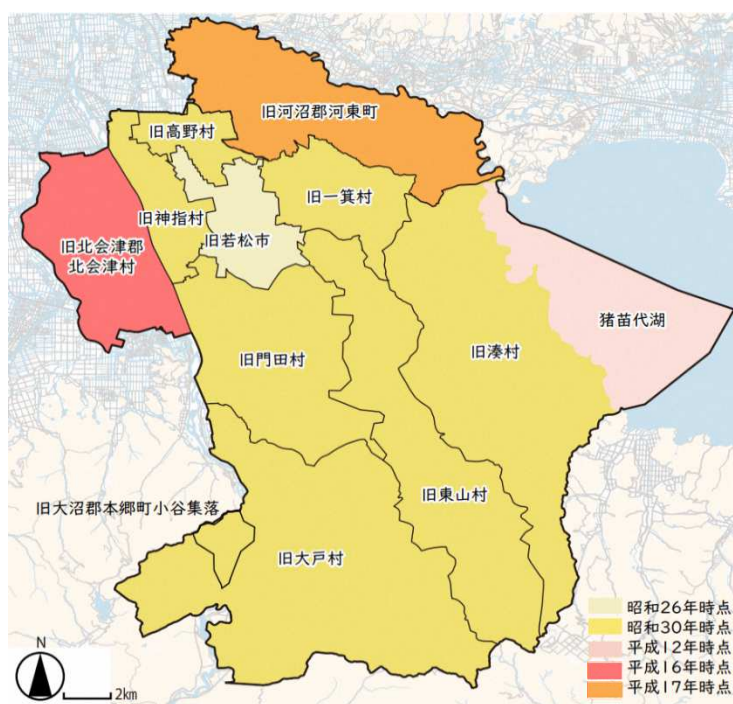
(1) 市町村の合併経緯

明治 32 年(1899)4月1日に「若松市」として、県内初の市政を施行し、昭和 12 年(1937)4月1日に北会津郡町北村の一部、昭和 26 年(1951)4月1日に残る北会津郡町北村と合併しました。その後、昭和 30 年(1955)1月1日に北会津郡高野村、東山村、門田村、神指村、一箕村、大戸村、湊村と合併し、市名も「若松市」から「会津若松市」と改め、昭和 30 年(1955)4月1日に大沼郡本郷町小谷集落、平成 16 年(2004)11月1日に北会津郡北会津村、平成 17 年(2005)11月1日に河沼郡河東町と合併し、現在の会津若松市の姿となりました。

市域変遷

年月日	変遷	面積 (k m ²)
明治 32 年(1899)4月1日	若松市制施行	5.75
昭和 12 年(1937)4月1日	北会津郡町北村の一部と合併	6.42
昭和 26 年(1951)4月1日	北会津郡町北村と合併	11.82
昭和 30 年(1955)1月1日	北会津郡高野村、東山村、門田村、神指村、一箕村、大戸村、湊村と合併し会津若松市となる	284.81
昭和 30 年(1955)4月1日	大沼郡本郷町小谷集落と合併	286.26
平成 2 年(1990)10月1日	国勢調査に基づく推定面積	286.38
平成 12 年(2000)2月1日	猪苗代湖の境界確定	315.28
平成 16 年(2004)11月1日	北会津郡北会津村と合併	343.46
平成 17 年(2005)11月1日	河沼郡河東町と合併	383.03
平成 27 年(2015)1月1日	—	382.99 [※]

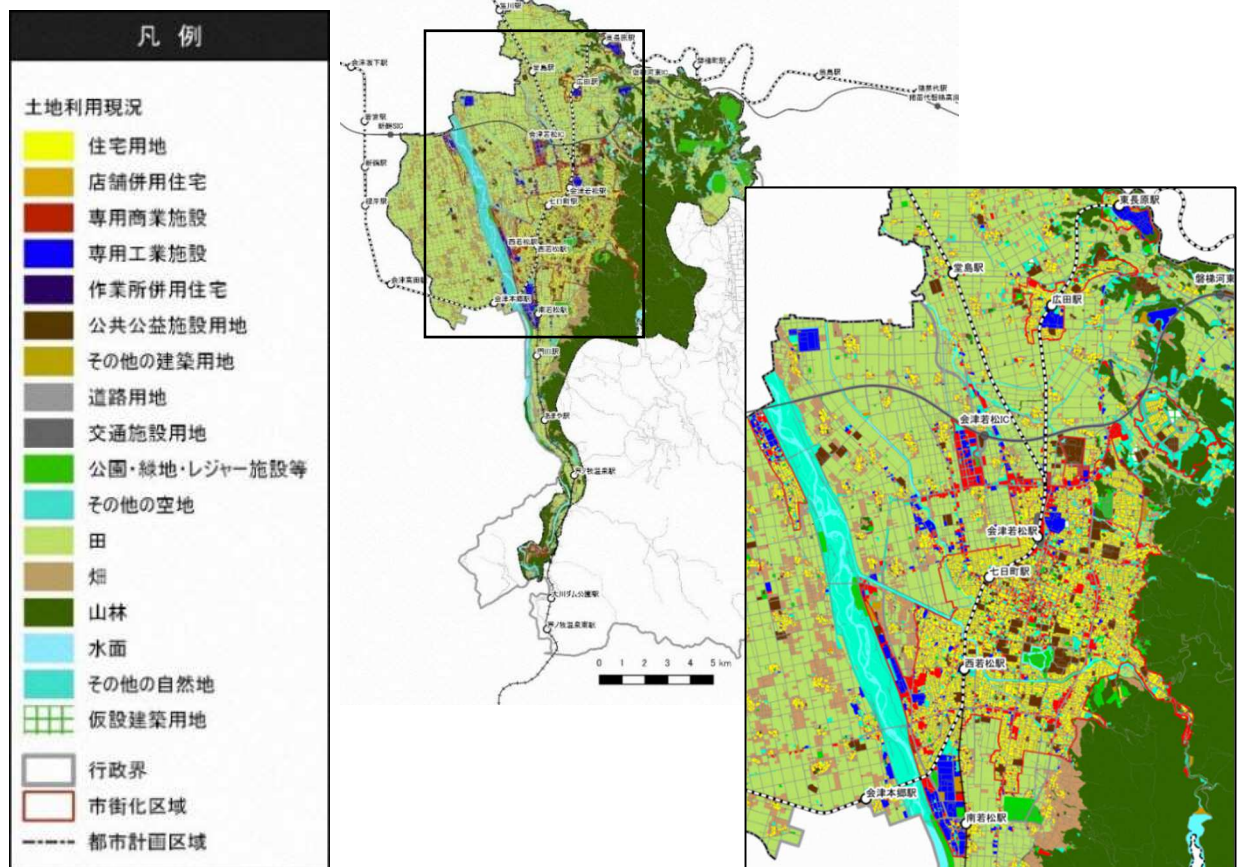
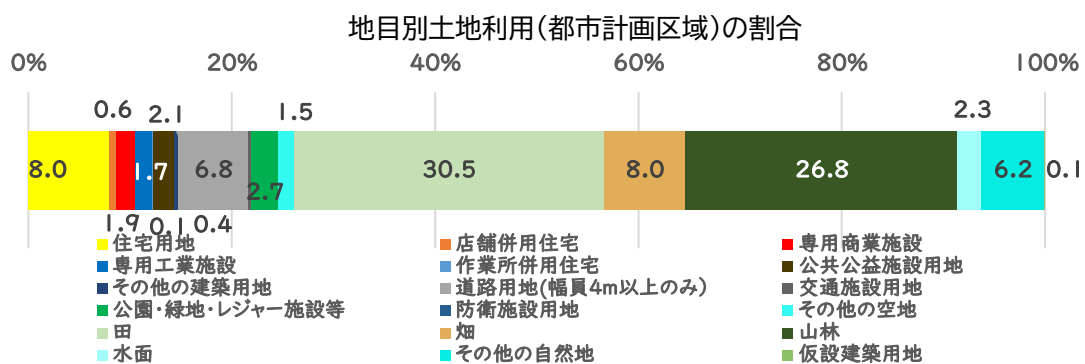
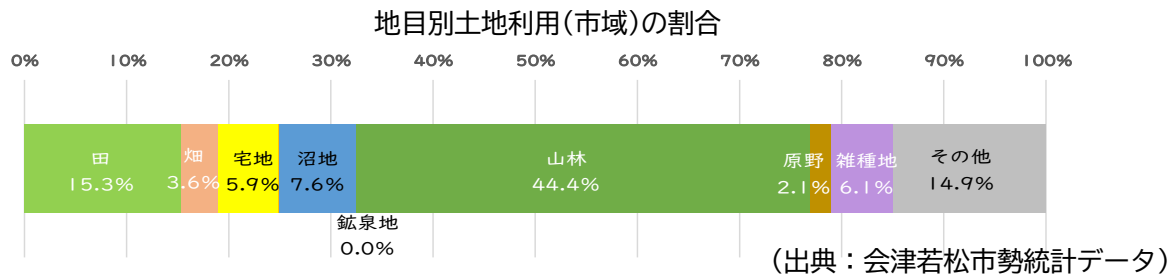
※平成 27 年(2015)1月1日現在の数値は、測量方法を変更して実施した結果による



市域の合併の変遷図

(2) 土地利用

本市は、市域の 44.4%を山林が占め、最も多い割合となっています。都市計画区域内においては、田が 30.5%と最も多く、次いで山林の 26.8%となっています。市域は南北に長い地形をなしており、市街地はその北西部に位置しています。また、市街地は東から西へ緩やかな傾斜をなし、中心を湯川が流下しています。一方、市街地を挟んだ北部と南部、さらに北会津、湊地区の平坦部は農地としての利用が多くなっています。



都市計画区域内土地利用現況図

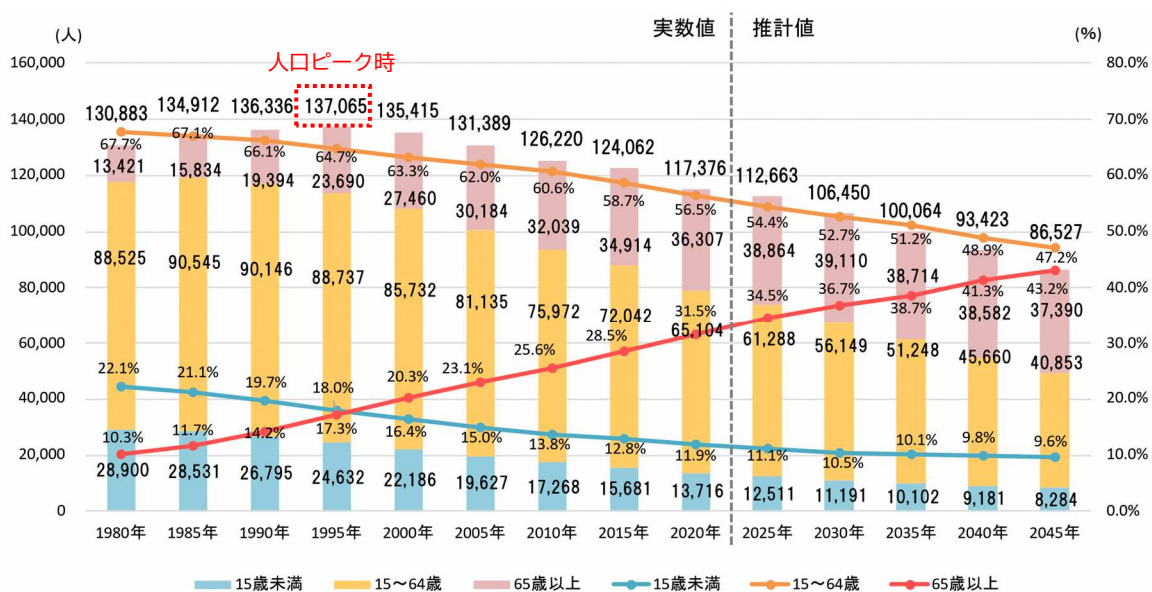
(出典：都市計画基礎調査平成 30 年(2018))

(3) 人口動態

本市の人口は、平成7年(1995)の約13万7千人をピークに減少傾向が続いており、令和2年(2020)1月現在の現住人口は約11万8千人で、近年は毎年約千人以上のペースで人口減少が続いています。その内訳をみると、自然動態で600人程度、社会動態で400人程度の減少となっています。

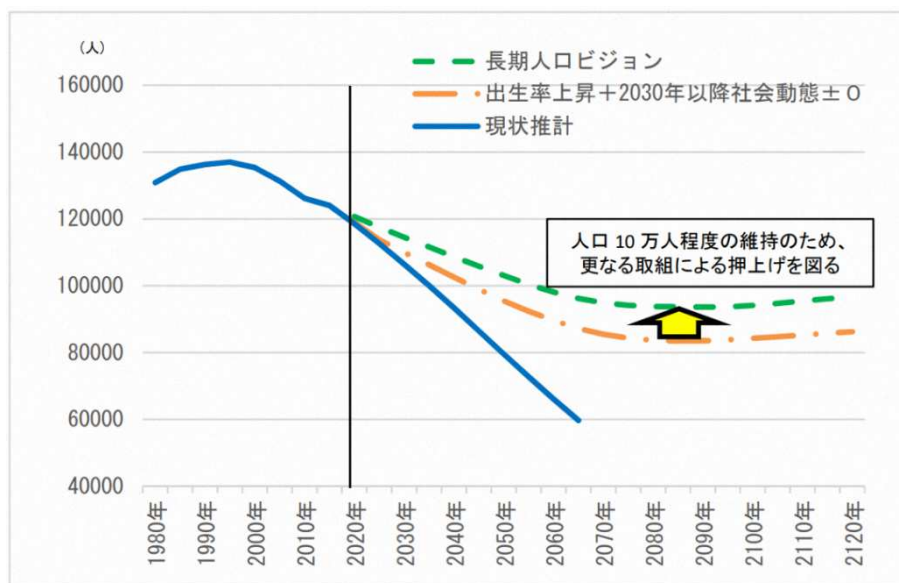
今後の人口動態については、出生率と社会動態に基づく推計では、安定人口は8万人強となりますが、本市のまち・ひと・しごと創生人口ビジョンでは、企業誘致等によるしごとづくりや効果的な観光施策の推進等により、交流人口を増やし、地域活力を向上させることにより、生産年齢人口の増加を図り、「人口10万人程度の維持」を目指しています。

◆全市的な人口推移（年齢3区分別人口の推移）



(出典：会津若松市立地適正化計画)

長期人口ビジョン



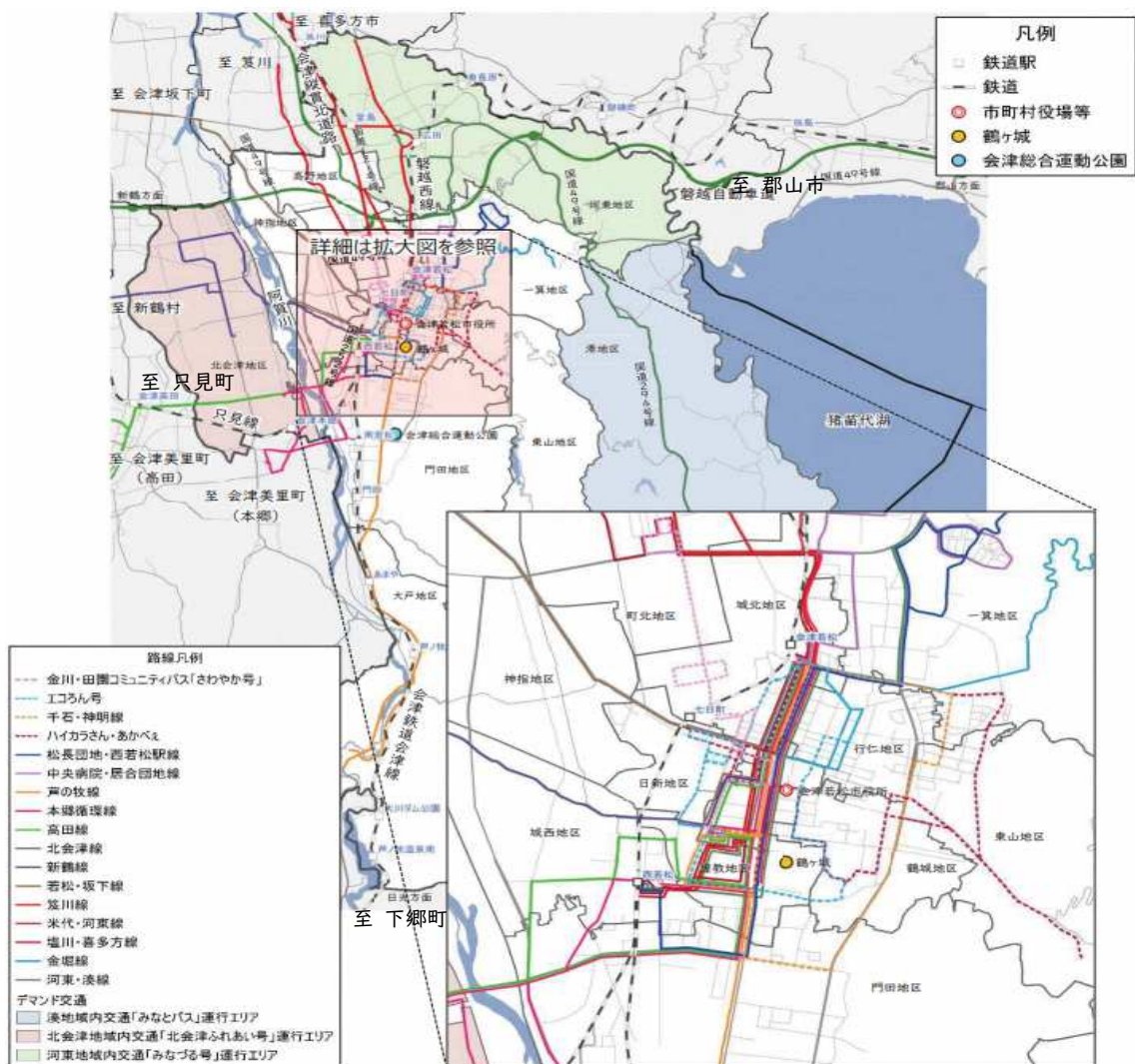
(出典：第2期会津若松市まち・ひと・しごと創生人口ビジョン)

(4) 交通機関

本市の公共交通は、広域交通として鉄道（JR 磐越西線、JR 只見線、会津鉄道会津線）と高速バス、周辺市町村とを結ぶ路線バスが運行しています。また、市域交通として、循環バスや生活路線バスに加え、交通空白地域から広域交通へ接続する地域内交通（定時定路線のさわやか号や、みなとバス・北会津ふれあい号・みなづる号などのデマンド交通）、タクシーといった多様な公共交通機関が運行しています。

バス路線は、会津若松駅を中心として放射線状に広がり、会津若松駅、神明通り、竹田総合病院、西若松駅を基軸として運行され、うち5路線は隣接する自治体と市中心部を結ぶ地域間幹線系統となっています。また、市内観光地を循環運行する「ハイカラさん」「あかべえ」は、観光客とともに、市民も利用する交通手段となっています。

また、広域的な道路網として、福島県いわき市から郡山市、会津若松市を經由して、新潟県新潟市までを結ぶ磐越自動車道が整備されています。自動車交通に関しては、会津縦貫北道路が本市と喜多方市とを結んでおり、山形県へのアクセスを担っています。また、現在、南会津との重要な路線である会津縦貫南道路が建設中です。



主要な道路や交通等

(出典：会津若松市地域公共交通計画)

(5) 産業

令和2年(2020)国勢調査によると本市の産業別就業者数の推移は、令和2年(2020)は、第1次産業が2,507人、第2次産業は、13,737人、第3次産業は37,089人となっており、いずれの産業も就業者数は減少しています。その割合の推移については、第1次産業と第2次産業が減少傾向、第3次産業が増加傾向にあります。

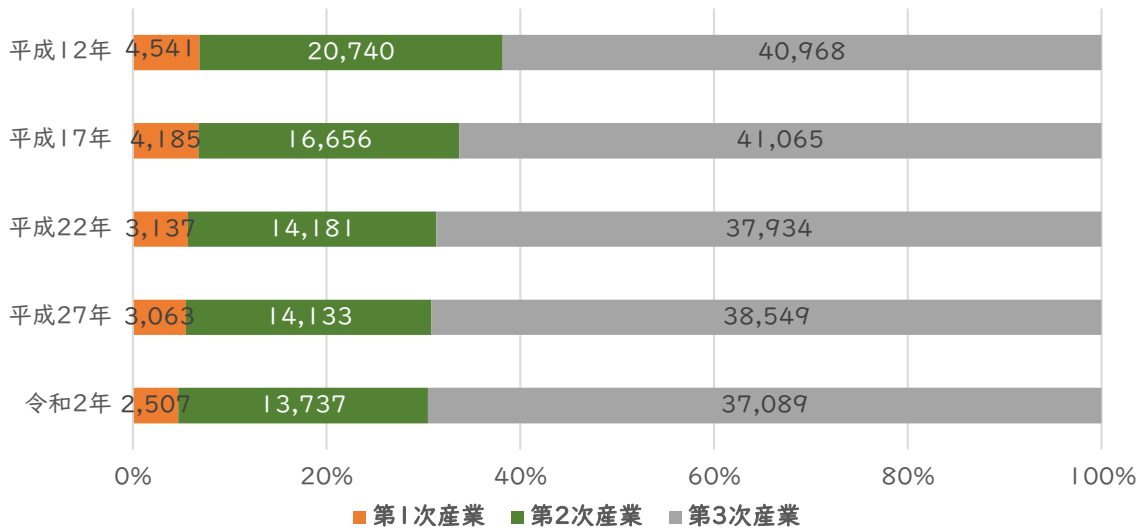
また、市勢統計データの事業所数をみると、平成18年(2006)をピークに減少傾向となっており、従業者数は平成26年(2014)に増加傾向に転じたものの、平成28年(2016)は減少傾向に戻っています。

また、産業構造を市内総生産の割合から見ると、社会情勢の変化に伴い、サービス業を含む第3次産業が増えており、製造業を含む第2次産業の占める割合は小さくなっています。

本市の伝統産業である酒造業の年間出荷額等の推移を見ると、平成23年(2011)まで減少傾向にありましたが、その後、緩やかな増加に転じています。令和4年(2022)には全国新酒鑑評会で福島県の日本酒が9回連続金賞受賞数日本一を達成しました。

漆器業の年間出荷額等の推移に関しても、東日本大震災が発生した平成23年(2011)まで減少傾向にありましたが、それ以降増加傾向にあります。

産業3部門別就業者数の割合推移



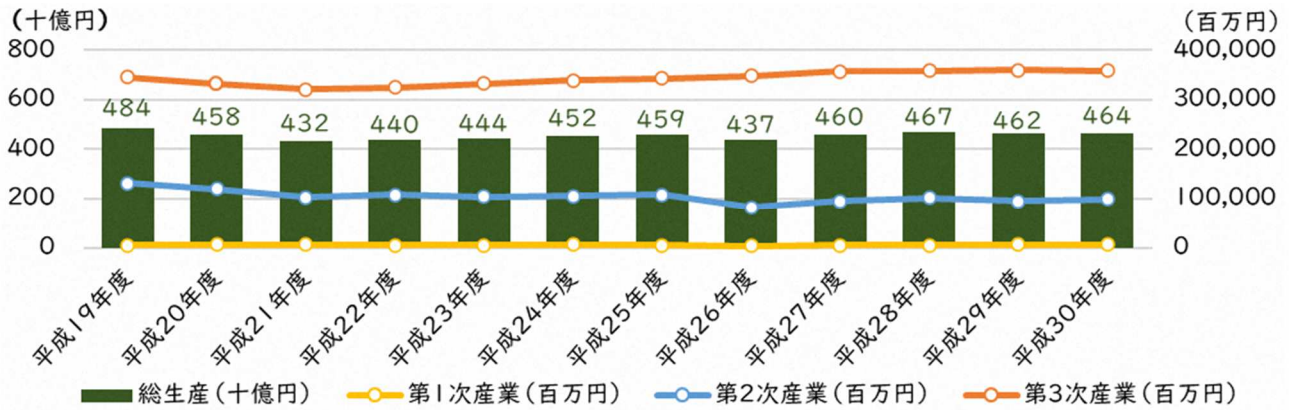
(出典：国勢調査(令和2年(2020)))

事業所数と従業者数の推移



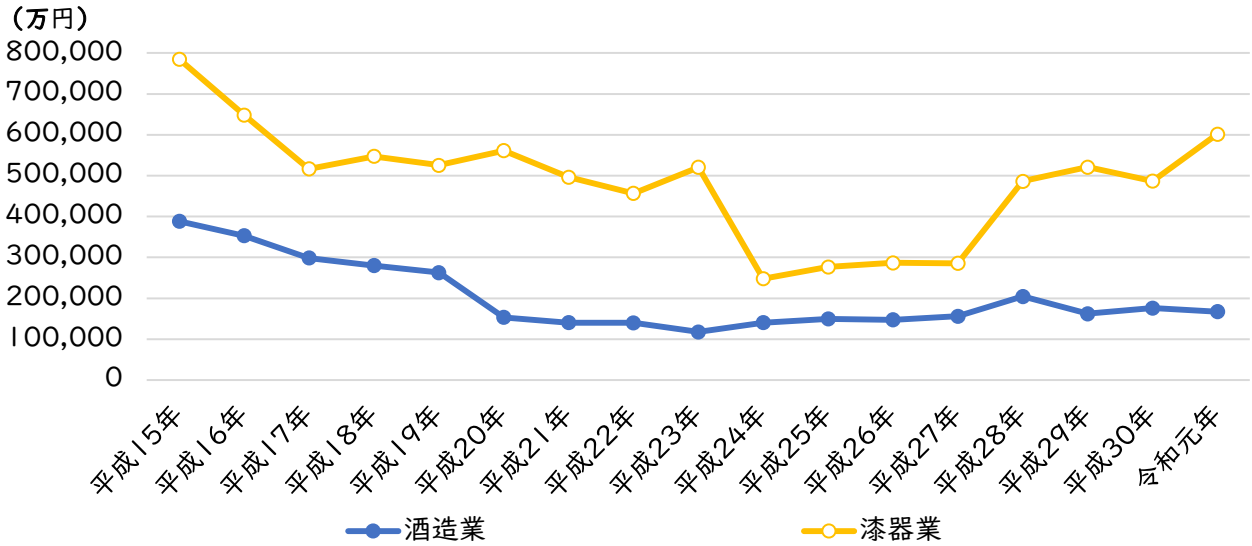
(出典：会津若松市勢統計データ)

産業別市内総生産



(出典：会津若松市勢統計データ)

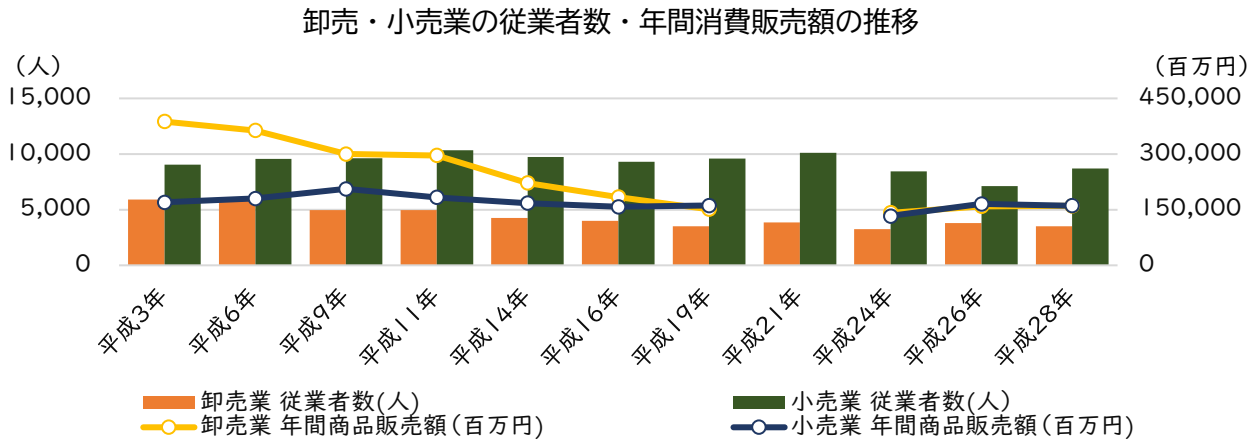
酒造業、漆器業の年間出荷額等の推移



(出典：会津若松市勢統計データ)

① 商業

卸売業について、従業者数は減少傾向となっており、年間商品販売額についても、平成3年(1991)の387,848百万円に対し、平成28年(2016)には、160,885百万円と減少傾向にあります。また、小売業について、従業者数は増減を繰り返してしていますが、年間商品販売額は、近年は微増傾向となっています。

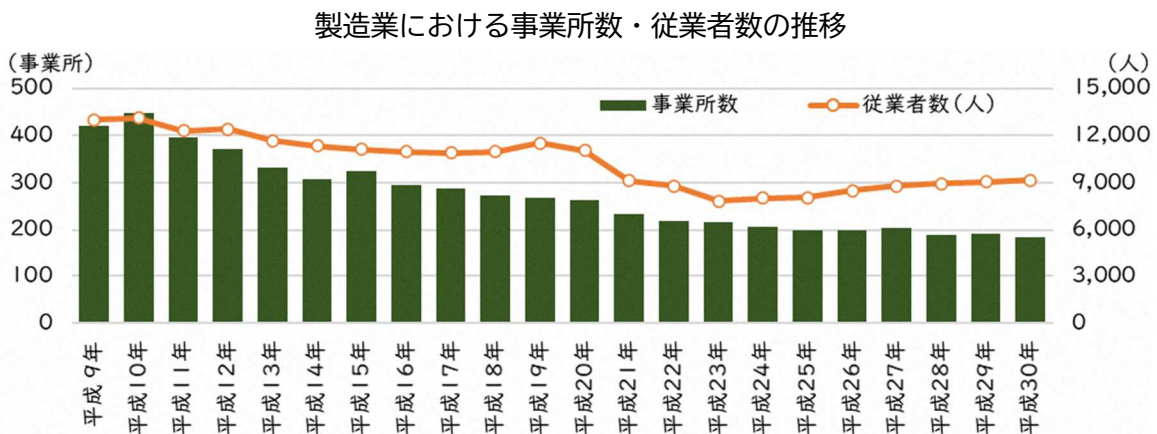


※平成21年(2009)の年間商品販売額の数値はないため掲載していない

(出典：会津若松市勢統計データ)

② 工業

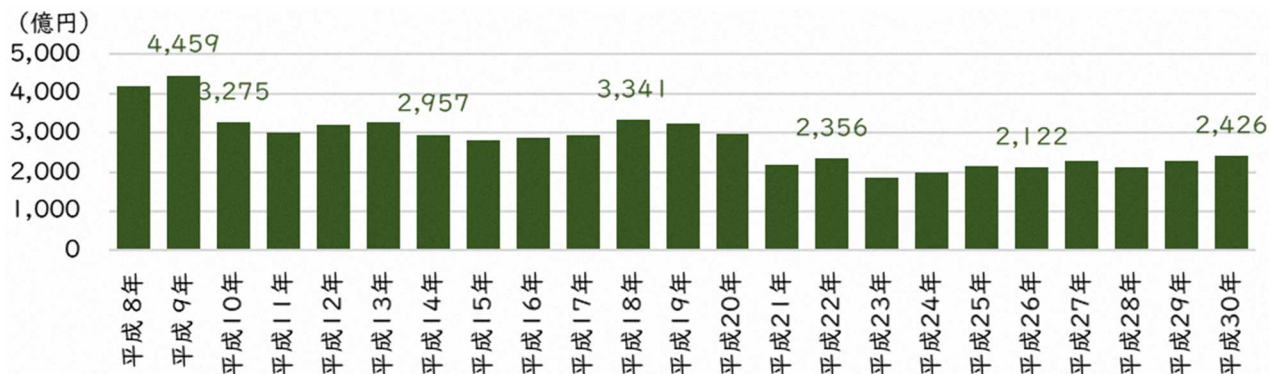
本市製造業の事業所数は、平成10年(1998)の448事業所をピークに減少傾向となっており、平成30年(2018)には184事業所となっています。従業者数は、平成10年(1998)の13,126人をピークに平成23年(2011)には7,860人となっており、その後低い水準で推移しており、東日本大震災の影響を受けたとされます。



(出典：会津若松市勢統計データ)

また、本市の製造品出荷額等も長期的に見ると減少傾向にありますが、東日本大震災の影響により落ち込んだ平成23年(2011)からは回復傾向となり、平成30年(2018)の製造品出荷額等は約2,426億円と、平成22年(2010)の約2,356億円を超え、東日本大震災以前の水準にまで回復しています。

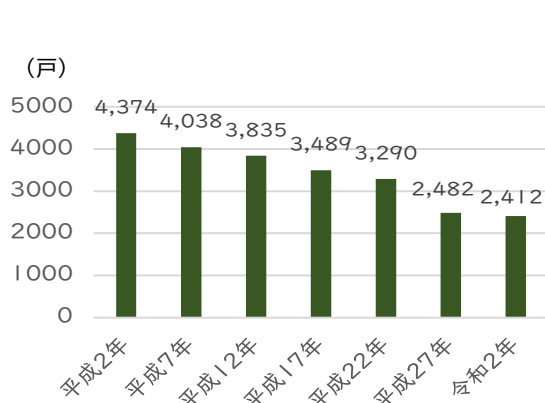
製造業における製造品出荷額等の総額の推移



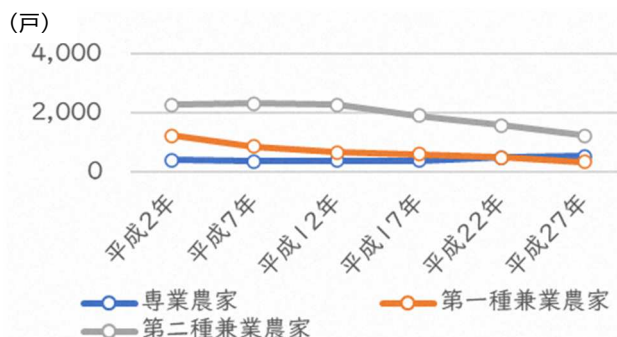
(出典：会津若松市勢統計データ)

② 農業

本市の農業の特徴を産出額で見ますと、米を中心として、野菜、果実等を多く生産しています。農家数については、平成2年(1990)に4,374戸でしたが、令和2年(2020)では2,412戸となっており、減少傾向にあります。平成2年(1990)と平成27年(2015)を比較すると、自家農業を主とする第一種兼業農家及び自家農業を従とする第二種兼業農家の数が大幅に減少しています。



農家数の推移



(出典：会津若松市勢統計データ)

【用語の説明】

専業農家：世帯員のなかに兼業従事者が一人もいない農家をいう。

第一種兼業農家：自家農業を主とする兼業農家をいう。

第二種兼業農家：自家農業を従とする兼業農家をいう。

農業産出額

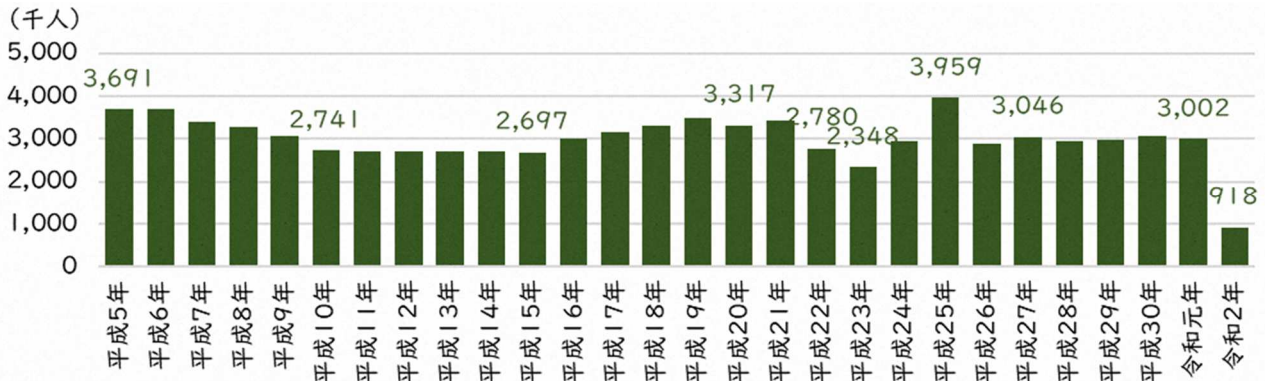
部門	農業産出額	部門	農業産出額
米	603 千万円	野菜	194 千万円
麦類	—	果実	85 千万円
雑穀	3 千万円	花き	—
豆類	4 千万円	工芸農作物	2 千万円
いも類	13 千万円	種苗・苗木類・その他	—
耕種計		993 千万円	

(資料：農林業センサス ※農業産出額は令和元年(2020年))

(6) 観光

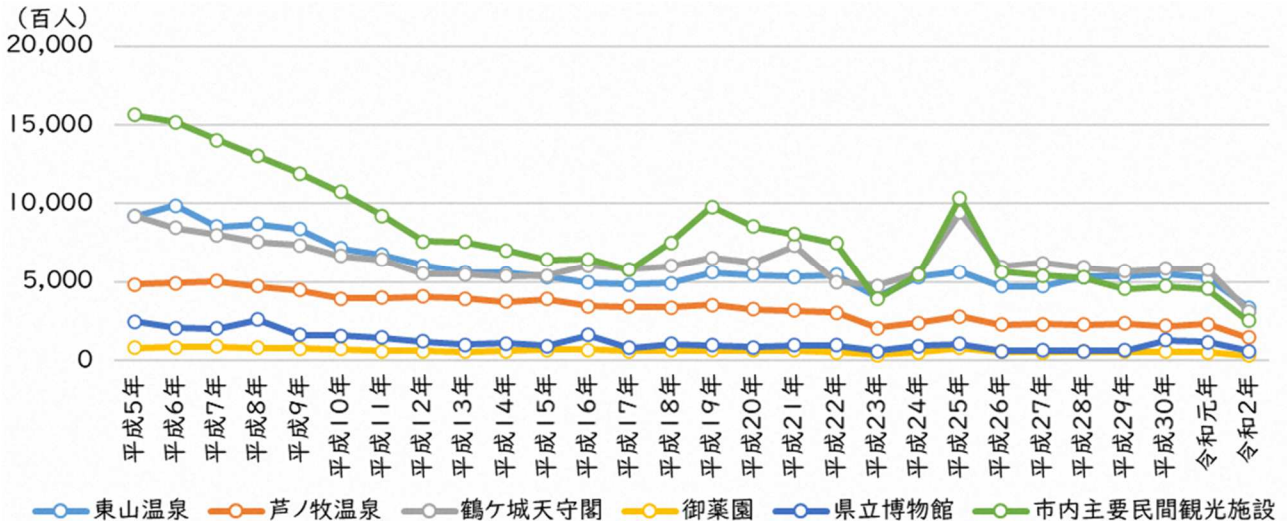
本市の観光客の入込数は、平成23年(2011)の東日本大震災の影響により激減しました。風評被害の影響もあるなか、平成25年(2013)の大河ドラマ「八重の桜」放送による効果もあり、3,959千人の入込数となり、また、平成27年(2015)の「ふくしまデザインেশョンキャンペーン」や「天守閣再建50周年記念事業」などの取組により、東日本大震災前の水準に戻りつつありました。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、令和2年(2020)は大幅に減少しています。

観光客数の推移



(出典：会津若松市勢統計データ)

主な観光施設利用者数の推移

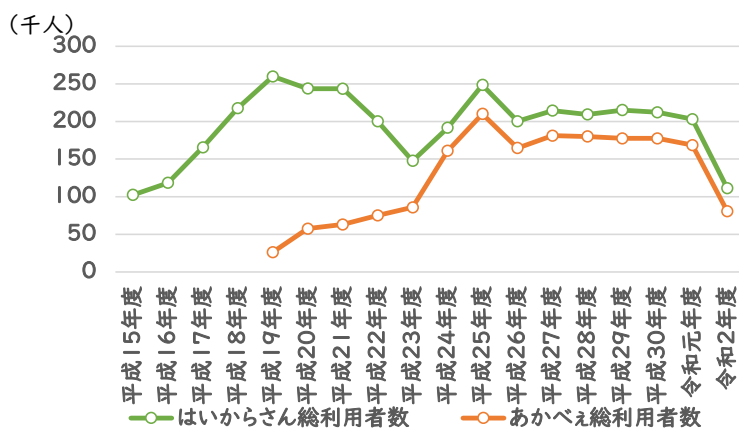


※市内主要民間観光施設の利用者数は、会津藩校日新館、会津武家屋敷、飯盛山、鶴ヶ城会館、会津村、観光農園の利用者数の合計

(出典：会津若松市勢統計データ)

観光客の2次交通手段として定着しているまちなか周遊バス（ハイカラさん・あかべえ）の利用者数は、東日本大震災後に減少に転じていました。しかし、平成25年(2013)大河ドラマ「八重の桜」放送による効果で利用者は増加しましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、令和2年(2020)は大幅な減少となっています。

まちなか周遊バス利用者数の推移



(出典：会津若松市の統計データ)

まちなか周遊バス ハイカラさん・あかべえ

Aizu Wakamatsu Classic Town Bus
Haikarasan & Akabee

会津若松市内を走るシトロエンボンネットバス。
ちょっと気どった小さな旅のまちなか巡りにご利用ください。
(補助ステップ・車イス用リフト付) ※混雑時は、異なる車両になる可能性もあります。



ハイカラさん



あかべえ

- まちなか周遊バス1回乗車…………… 大人210円・小学生110円
- まちなか周遊バス専用1日フリー乗車券…… 大人600円・小学生300円

会津バス駅前案内所・会津バス発着ターミナル・会津武家屋敷
東山温泉観光協会・鶴ヶ城観光案内所・飯盛山観光案内所・御薬園・町方伝承館
会津若松旅館ホテル組合加盟宿・七日町駅カフェ

まちなか周遊バス

(7) 博物館等の施設

市内には、福島県立博物館や、会津若松市歴史資料センター(まなべこ)など複数の公立施設が設置されており、様々な歴史や文化に関する展示や収集等を行っています。その他、複数の民間施設でもテーマごとに展示を行っています。

市内の主な公共施設

施設名	概要
<p>会津若松市歴史資料センター(まなべこ)</p> 	<p>(住所) 会津若松市城東町2-3</p> <p>展示コーナーや企画展、学習コーナー等を有し、会津の歴史や文化、先人などをわかりやすく紹介しています。また、まちなかを実際に散策しながら解説する「歴史文化講座」も実施しており、「まなべこ」の愛称で親しまれています。</p>
<p>若松城天守閣郷土博物館</p> 	<p>(住所) 会津若松市追手町1-1</p> <p>史跡若松城跡に建つ再建天守が郷土資料館を兼ねており、会津の武家文化をテーマに、鶴ヶ城(若松城)の歴史や白虎隊、会津の偉人に関する資料の展示を行っています。</p>
<p>会津若松市立会津図書館</p> 	<p>(住所) 会津若松市栄町3-50</p> <p>明治36年(1903)に全国初の市立図書館として国から認可され、平成23年(2011)に公民館との複合施設である「会津若松市生涯学習総合センター」内に移転開館しました。現在、約38万冊(うち、郷土資料:約4万冊)を所蔵し、レファレンスサービス、視覚障がい者等サービス、移動図書館の運行など、多様なサービスを提供しています。</p>
<p>福島県立博物館</p> 	<p>(住所) 会津若松市城東町1-25</p> <p>昭和61年(1986)に県立の総合博物館として開館し、これまで県民の教育、学術及び文化の発展の為にさまざまな活動を行ってきました。施設内には、歴史にふれることができる展示室や体験学習室があり、季刊誌を発行して、イベント等おすすめ情報を発信しています。</p>

3. 歴史的環境

(1) 歴史

①旧石器時代・縄文時代

本市で最も古い人間の活動は、猪苗代湖西側の赤井谷地沼野植物群落（湊地区）^{あかいやちしやうやしよくぶつぐんらく}周辺で認められます。赤井谷地沼野植物群落は北方系の植物相を持つ湿原で、かつては猪苗代湖と一体の湖でしたが、水位が低下した後も湿地として残りました。

笹山原遺跡群（湊地区）^{ささやまはらいせきぐん}はその東側に分布します。後期旧石器時代のおよそ3万2千年前の石器が出土し、後期旧石器時代終末期には、北方系の細石刃^{さいせきじん}を主体とする石器が多く出土しています。

縄文時代のもっとも古い時期である草創期の土器も、笹山原遺跡群で出土しています。笹山原遺跡群のうち、笹山原遺跡 No.11 からは、土器の口の部分に粘土紐をめぐらせる隆起線文土器と呼ばれる、最古段階の土器が出土しています。

早期、前期には、人々の活動が、会津盆地の東側山間部の湊地区、河東地区大野原、南側山間部の大戸地区に広がります。会津盆地内の平坦部でも、近年、高野地区の発掘調査で早期の土器が発見されています。今後盆地内でも、古い時期の人間の活動痕跡が発見される可能性があります。

中期になると、他地域との交流も盛んになります。大戸地区を中心に遺跡の数が増え、本能原遺跡^{ほんのうはらいせき}（大戸地区）で出土した土器のなかには、口の部分が新潟県を中心とする馬高式（火炎系）の文様で、胴体部分は東北の大木式（縄文と沈線）の文様を持つものや、関東の阿玉台式^{あたまだい}の特徴を持つものなどが見られ、日本海側や関東との交流があったことがわかります。

後期の遺跡は、会津盆地の縁辺部にも広がります。大戸地区、湊地区などで多くの調査が行われており、坊主山遺跡（湊地区）^{ぼんずやま}では、石の錘^{おもり}が多く出土したため遺跡の近くで漁を行っていたと考えられます。

晩期は、上雨屋遺跡^{かみあまや}（大戸地区）、墓料遺跡^{ぼりょう}（一箕地区）で調査が行われ、墓料遺跡では、大型竪穴住居跡も発見されています。



笹山原遺跡群の石器（湊地区）



上高野C遺跡の縄文時代早期土器（高野地区）



坊主山遺跡の石錘（湊地区）

②弥生時代

弥生時代になると、西日本との交流が認められます。前期の西日本を中心に分布する遠賀川系おんががわの木葉文土器が、墓料遺跡で出土しています

中期には遺跡数も増え、人々の活動の痕跡が多く見られます。

今和泉遺跡いまいずみ（北会津地区）で住居跡が見つかったため、会津盆地の中央部にも居住域が広がったことがわかります。南御山遺跡みなみおやま（門田地区）、一ノ堰B遺跡いちのせき（門田地区）、川原町口遺跡かわらまちくち（中心地区）などでは、土坑墓と呼ばれる墓が作られました。

また、宮ノ腰遺跡みやのこし（河東地区）では、稲の穂を刈る道具の石包丁が出土しています。遅くてもこの頃には、会津でも稲作が始まりました。

後期になると、人々の活動がさらに活発になります。北方の影響を受けて成立したとされる天王山式てんのうやま土器が、屋敷遺跡いすみ（町北地区）や和泉遺跡（北会津地区）、郡山遺跡（河東地区）など、盆地内の多くの遺跡で出土しています。後続する時期には、北陸系の土器や北関東に広く分布する十王台式土器も出土しています。この時期は、日本海側と太平洋側の人々との交流が盛んに行われていたことがわかります。



墓料遺跡の木葉文土器
（一箕地区）



門田条里制跡の弥生土器
（門田地区）

③古墳時代

崇神天皇すじんの時代、北陸に派遣された大毘古命おおひこのみことと東方に派遣された建沼河別命たけぬなかわけのみことの2人の将軍が、「相津」で出会ったことが『古事記』に記されています。これが「会津」の地名の由来です。このことから、会津が日本海側からと東方からの道が交差する地域であったことがわかります。また、それだけではなく、中央で作られた歴史書に会津のことが書かれているということは、勢力を拡大しようとしていたヤマト政権が、会津を重要視していたことを示しています。

それがわかるのが古墳時代前期の大塚山古墳（一箕地区）です。豊富な副葬品はヤマト政権からもたらされたもので、なかでも三角縁神獸鏡さんかくえんじんじゆうきょうは、東北で唯一の出土品です。同じ地区にある堂ヶ作山古墳どうがさくやま（一箕地区）は、出土した土器により、大塚山古墳より築造時期が古いと考えられ、飯盛山古墳いもりやま（一箕地区）も発掘調査は実施されていませんが、その形状などから古い時期の古墳と考えられています。



大塚山古墳の三角縁神獸鏡
（一箕地区）



堂ヶ作山古墳の赤彩土器
（一箕地区）

盆地の中央部には田村山古墳（北会津地区）が築かれます。副葬品として鏡2点や鉄剣の破片などが出土しました。鏡2点のうち1点は中国製とされ、故意に打ち欠いて納めた破鏡との指摘もあります。出土品の比較により、一箕地区の古墳よりも古い可能性が考えられています。



田村山古墳出土品
（北会津地区）

郡山遺跡では、4世紀に流れていた河川跡が確認され、東海系の大廓型と呼ばれる土師器（素焼きの土器）が出土しました。祭祀に使用されたと考えられる土器です。この土器は、県内ではいわき市、小野町で出土しており、東方の文化が太平洋側から阿武隈高地を通過して会津に達していると考えられます。また、郡山遺跡では北陸系の土器も出土しています。北陸系の土器は、中通りを通過していわき市でも見られます。文物の交流が盛んに行われてきたことがわかります。

中期になると、前期のような大型の前方後円墳は築造されなくなりますが、鏡山古墳（河東地区）や大塚山2号墳（一箕地区）のような円墳の築造は行われます。鏡山古墳から鉄刀、砥石などが出土しており、鏡山古墳の西約1kmに位置する倉道遺跡（河東地区）では、石製模造品が出土しています。石製模造品は、鉄製品などを模倣して作られた石製品です。豪族居館から発見されることが多いため、倉道遺跡は、鏡山古墳被葬者の居館跡である可能性も指摘されています。

後期は、鉄刀を出土した長山古墳（高野地区）や、一箕地区などに小規模密集古墳群である群集墳が造られます。



駒板新田横穴群（河東地区）

終末期になると、大塚山古墳がある南側斜面には大塚山横穴墓（一箕地区）が築かれており、象嵌を施した鉄刀が出土しました。倉道遺跡で集落跡が確認され、その周辺で活動していた人々の墓と考えられるのが駒板新田横穴群（河東地区）です。また、古屋敷古墳群（河東地区）は、3基が調査され、鉄刀や土師器などが出土しています。出土した土器から、駒板新田横穴群は奈良時代まで、古屋敷古墳群は平安時代まで築造されたと考えられます。これらの遺跡を残した人々の活動が、次の時代につながっていきます。

④奈良時代・平安時代

律令国家体制に伴い、会津郡が成立しました。その役所跡（郡衙）が郡山遺跡とされ、「會」と墨書された土器などが出土しました。奈良時代前半の関東系の土器が出土しており、その成立に関東からの影響があったと考えられます。また、役人の居宅跡と考えられる遺構も確認されています。



郡山遺跡の墨書土器「會」
（河東地区）

奈良時代後半になると、倉庫を郡内に分散して建てるように中央から命じられます。矢玉遺跡（高野地区）、上居合遺跡（一箕地区）、門田条里制跡に郡の倉庫があったと考えられます。

上吉田遺跡（高野地区）では、河川跡から大量の墨書土器が見つかり、郡が祭祀を行った痕跡と推定されています。

郡山遺跡では鋳造関連遺構が発見され、梵鐘などの鋳型が出土しました。奈良時代末から平安時代初頭のもので、近くに、寺院があったと考えられます。この時期の梵鐘の鋳型の出土は会津では初めてで、県内でも太平洋側の浜通り地方に2例あるだけです。

土師器（素焼きの土器）の焼成は田中遺跡（河東地区）で行われ、奈良時代後半に始まったことが確認されています。これに続き長谷地A遺跡（河東地区）、平安時代に入り笹山原遺跡 No. 16（湊地区）で焼成が行われます。

郡衙で使われたと考えられる瓦は、村北窯跡（一箕地区）で焼成されました。古墳時代終末から奈良時代初頭の操業と推定されます。須恵器（窯で焼成した土器）の焼成は奈良時代中頃には新田山窯跡（河東地区）、後には大戸窯跡群（大戸地区）が操業を開始します。大戸窯跡群は東北地方最大の窯跡群であり、その製品は、国府である多賀城や、東北の官衙（役所）関連の施設に供給されました。

奈良時代後半以降、会津では遺跡の数が急激に増えます。人口も大幅に増加したと考えられます。その頃、陸奥国は蝦夷と戦争を続けており、会津の兵士も戦地に赴いています。このことを示す木簡が、宮城県から出土しています。

人口増加に伴い、仏教も広まったと考えられます。会津坂下町の高寺山遺跡では山岳寺院の痕跡が確認されており、その始まりは奈良時代の中頃とされています。本市でも、ほどなく郡山遺跡で梵鐘の鋳造が行われます。

会津に徳一が入り仏教を広めたのが平安時代の初期とされ、国指定の地蔵堂がある延命寺（河東地区）は、大同2年(807)徳一の創建とされます。

その後の仏教の広まりは、東高久遺跡（神指地区）の仏堂跡や、矢玉遺跡の在地の僧の存在を示す木簡などの出土、明光寺の木造十一面観音立像（門田地区）や羽黒山湯上神社（東山地区）の銅造聖観音菩薩立像などが伝わったことにも見てとれます。

康保元年(964)には、空也上人により八葉寺（河東地区）が創建されます。現在



上吉田遺跡の土器出土状況
（高野地区）



郡山遺跡の梵鐘鋳型
（河東地区）



村北窯跡の軒丸瓦
（一箕地区）



大戸窯跡群の須恵器
（大戸地区）

の八葉寺阿弥陀堂は桃山時代に建てられたもので昭和 25 年(1950)に、国の重要文化財の指定を受けています。

天喜 3 年(1055)、前九年の役で源頼義、義家父子が陸奥に赴くとき、河東町熊野堂の打替山に熊野三社が勧請されたと伝えられています。その後、後三年の役で再びこの地を訪れた源義家は、喜多方市新宮の地に、熊野三社を移したとされています。

⑤鎌倉時代・室町時代

鎌倉に武家政権が誕生すると、三浦半島に拠点を持つ三浦一族の佐原義連が、文治 5 年(1189)に会津に所領を与えられます。藤倉の館跡(河東地区)は、義連の孫の藤倉盛義が建久 3 年(1192)に築き住んだと伝えられています。

佐原氏の家督を継いだのは、盛義の弟である光盛で、蘆名を名乗ります。康暦元年(1379)に、7 代の直盛が会津に本拠を移したとされます。その当時、若松は黒川という地名で、至徳元年(1384)には、現在の鶴ヶ城(若松城)(中心地区)周辺の小高木(小田垣)に東黒川館を築きました。

直盛は、商人の築田盛胤に命じて、摂津(現・大阪府の北中部)の住吉大社から神社を勧請したとされています。それが住吉神社(門田地区)です。この神社は、商売繁盛に御利益があるとされており、直盛は、領内の商業振興に力を入れたとされます。

この頃、鶴ヶ清水が発見され、それを利用し会津松平氏庭園(中心地区)が整備されました。

その後、蘆名氏は北田氏、猪苗代氏、新宮氏といった他の有力者を滅ぼし、会津の領主として勢力を伸ばしていきます。

大永元年(1521)、蘆名 15 代の盛舜のときに起きた猪苗代盛光の反乱では、盛舜に討たれた軍勢の供養碑が、八葉寺境内に残っています。農地基盤整備前、この周辺に散在していたものを集めたものですが、古くには猪苗代町から磐梯町を通り湯川村方面へ通じる道がこの近くにあったと考えられています。

蘆名氏の勢力が最大となったのは、天文 22 年(1553)に黒川城主となった 16 代盛氏の時です。永禄 11 年(1568)には、現在の会津美里町に向羽黒山城を築きますが、盛氏の死後は、蘆名氏の勢力が次第に衰えます。

この時代は、死者の冥福や自分の死後の往生を祈る目的で、寺院の境内や道路の辻などに、板碑と呼ばれる石製の供養塔が造られました。これらのことから、人々の厚い信仰心が見て取れます。板碑が特



会津松平氏庭園の鶴ヶ清水
(中心地区)



猪苗代勢武将等の供養碑群
(八葉寺境内)(河東地区)



蘆名盛氏墳墓(門田地区)

に多く残っているのが、湊地区と河東地区です。湊地区には東田面供養碑や岩倉山石造塔婆、館山供養碑など、河東地区には応長の碑、曆応の碑、観応の碑などがあります。

また、自在院（中心地区）には、平安時代末期から近代までの約 600 巻の大般若経が残されており、旧米沢上街道沿いには、七ツ壇経塚（高野地区）も造られました。

⑥安土・桃山時代

天正 17 年（1589）、伊達政宗が会津に攻めてきます。蘆名氏と伊達氏が戦った摺上原の戦いで蘆名氏側として奮戦し、活躍したのが芦ノ牧の地頭、鹿目伊豫で、伊豫の活躍を伝える説明板（大戸地区）が地元の保存会により建てられています。この戦いで蘆名氏に勝利した政宗は、黒川城に入ります。



鶴ヶ城（若松城）の金箔瓦
（中心地区）

天正 18 年（1590）、天下統一を果たした豊臣秀吉は興徳寺（中心地区）に入ります。奥州仕置により伊達政宗が宮城県の岩出山城に去り、蒲生氏郷に会津の地が与えられました。

「黒川」を「若松」と改めた氏郷は、文禄元年（1592）から城下町づくりに着手し、現在の市街地の基礎をつくりました。当時の外濠から内側の範囲は、若松城郭内武家屋敷跡（中心地区）の名称で埋蔵文化財包蔵地として登録されています。鶴ヶ城（若松城）には七層の天守が築かれたとされ、金箔瓦が使用されました。発掘調査でも金箔瓦が出土しています。

氏郷は、農地の検地を行い生産高の把握を行いました。漆器職人や酒造職人などを近江から会津に招き、産業振興に力を入れ、楽市楽座の政策により商業の発展を図りました。また、茶道に通じる「利休七哲」の一人であった氏郷は、千利休の死後、その子、少庵を会津に引き取り保護しました。少庵の作と伝わる茶室麒麟閣（中心地区）が、鶴ヶ城（若松城）本丸に残されています。

氏郷の死後、秀行が跡を継ぎますが、御家騒動のため蒲生氏は宇都宮に移封され、慶長 3 年（1598）、上杉景勝が会津に入りました。

上杉景勝は、慶長 5 年（1600）、阿賀川右岸に神指城の建設を始め、徳川家康との間で緊張が生まれます。その後、家康は会津に向けて出兵しましたが、石田三成ら大坂城の奉行衆が西国の大名とともに家康を撃つべく出陣したため、家康は西に向かい関ヶ原で双方が激突し、家康軍が勝利しました。



神指城本丸の石垣（神指地区）

この戦いで石田三成と呼応していた上杉景勝は、徳川家康により米沢に移封されました。

⑦江戸時代

上杉の移封後、関ヶ原で家康側についた宇都宮の蒲生秀行が、再び会津に入ります。その10年後の慶長16年(1611)、会津に大地震が起きました。城の石垣は崩れ、天守は傾き、阿賀川が堰き止められるなどの甚大な被害がありました。その翌年、秀行は死去し、その跡を継いだのは秀行の子、忠郷でしたが、寛永4年(1627)、後継ぎがないまま死去してしまいます。

その後、伊予の松山から蒲生氏に替わり入部したのが加藤嘉明です。嘉明は、「日野町」を「甲賀町」、「背あぶり峠」を「冬坂峠」と地名を改めました。滝沢街道(一箕地区)は蒲生氏郷が造ったとされますが、加藤嘉明が石畳にするなどの整備を行いました。息子の明成は、五重の天守を造るなど、鶴ヶ城(若松城)の改修を行いました。家臣ともめごとを起こし、出雲の石見に移封されました。

キリスト教を信仰していた蒲生氏郷の時代以降、領内にはキリスト教信者が増えていましたが、この頃になると、幕府のキリスト教禁止令が強化されたことにより、寛永3年(1626)、蒲生忠郷により初めてキリシタンの処刑が行われたとされ、加藤明成が藩主のときには、キリスト教徒の長である横沢丹波とその家族などが、越後街道を流れる湯川の柳橋周辺において処刑されたとされます。

その言い伝えどおり、昭和20年(1945)代以降に行われた農地整備の際、この地から多くの人骨が出たため、供養碑としてキリシタン塚が建立されました。

明成が去った後、寛永20年(1643)、2代将軍徳川秀忠の子である保科正之が会津藩主となります。正之は、検地を行い、民のために社倉制度を取り入れ、会津藩の憲法ともいえるべき「家訓十五ヶ条」を制定するなど、会津藩の礎を作りました。晩年、会津に戻った正之は、猪苗代町の美祢山に墓所を定めました。正之を祀っている土津神社がその墓所です。また、武士などの葬地、旧会津藩大窪山共同墓地(門田地区)なども設けました。

建福寺(門田地区)は、保科正之が建立した寺です。正之は高遠藩保科家の養子として育てられましたが、会津に来てからもその恩を忘れず、養父や養祖父を祀るためにこの寺を建てました。

明暦3年(1657)、江戸で明暦の大火が発生します。火は会津の江戸藩邸にも及び、正之の嫡子である正頼は、その時の風邪が原因で死去してしまいます。その墓地として選ばれたのが、会津藩主松平家墓所(院内御廟)(東山地区)です。正頼



旧滝沢街道(一箕地区)



鶴ヶ城(若松城)
加藤氏時代の石垣(中心地区)



キリシタン塚(神指地区)



会津藩主松平家墓所
正頼の墓(東山地区)

の弟、正純^{まさずみ}や、2代藩主以降の藩主やその家族の墓として、その後も使われます。

3代藩主正容^{まさかた}の代には、松平姓を名乗り、葵紋の使用を徳川家から許されました。正容は、薬用ニンジンの種を幕府からもらい受け領内で栽培を始め、この種から作られた薬用ニンジンは、オタネニンジンと呼ばれました。



会津農書の碑
(神指地区 新城寺境内)

この頃、神指地区幕内の佐瀬与次右衛門^{させよじえもん}によって『会津農書』(貞享元年(1684))が書かれました。この本は、農業技術を体系化した農業指導書で、与次右衛門は、文字が読めない農民のために、教えを歌や絵で記した『会津歌農書』(元禄末頃(1700頃))も書きました。これにより、科学的視点で農業を行うことができるようになりました。

5代藩主容頌^{かのが}の家老、田中玄宰^{はるなか}は、薬用ニンジン栽培に成功している出雲から種を大量に買い付け、領内全体に薬用ニンジン^{きよみがわ}を植えて栽培に適する土地を探しました。現在も、会津では薬用ニンジンが栽培され、会津の特産品となっています。

このほか、会津藩の製造する銘柄酒「清美川」の販売などを通し、容頌は藩の財政再建に取り組みました。また、玄宰の建議により享和3年(1803)、藩校の日新館(中心地区)が設立され、藩士の子弟の人材育成に力を入れました。

日新館では、文武双方に力を入れた教育を行い、藩士の家計救済のために給食を導入するなど、独特な政策も行いました。これは、いわば学校給食であり、日本初の制度です。

また、日新館には天文台もあり、毎年、諏方神社の神官や暦学者などが暦を編纂し藩に提出しました。この会津暦は、東北から北関東方面まで流通しており、販売は七日町の菊地家だけが許されていました。



会津暦(中心地区)

外国船が日本の沿岸に現れるようになると、7代藩主容衆^{かたひろ}、8代藩主容敬^{かたたか}の代には、幕府から北方警備や江戸湾警備を命じられ、多くの藩士が警備に赴きました。

幕末、京都では尊王攘夷派^{そんのうりょうい}の動きが活発になり、治安が不安になりました。このため、幕府は9代藩主容保^{かたもり}を京都守護職に任じ、京都の治安維持にあたらせました。容保は、新選組を配下に置き、攘夷派を駆逐することで、孝明天皇から絶大な信頼を得ましたが、その後、長州藩と薩摩藩が同盟を組み、倒幕の機運が高まりました。慶応4年(1868)、鳥羽伏見の戦いで旧幕府軍が敗戦すると、江戸城の無血開城後、新政府軍は



旧滝沢本陣御入御門
(一箕地区)

東北へ侵攻を始めます。東北諸藩は奥羽越列藩同盟^{おううえつれっばんどうめい}を組み新政府軍に対抗しましたが、会津への侵攻は止められず、会津戦争が勃発しました。容保は、旧滝沢本陣(一箕地区)で白虎隊士中二番隊に出撃命令を下します。白虎隊士は、滝沢街道(一箕

地区)を通り戸ノ口原での戦いに臨みますが、ほどなく退却し、戸ノ口堰洞門(一箕地区)をめぐり飯盛山にたどり着き、そこで自刃しました。その後、籠城は1か月に及びましたが、会津藩は降伏し、開城を迎えました。

⑧明治時代以降

明治元年(1868)、松平家の家名再興が許され、斗南藩に3万石が与えられました。明治2年(1869)、廃藩置県により若松県が設置されると、鶴ヶ城(若松城)内に若松県庁が置かれます。

明治4年(1871)以降、田畑の開墾を条件に無償で土地を払い下げることが通知され、郭内外を隔てる濠は次第に埋め立てられ、土塁と濠はほとんど姿を消します。明治7年(1874)に天守が取り壊されることが決まると、その前に一般の市民に城内が公開されました。

明治9年(1876)には、若松県は旧福島県、磐前県と合併し、今の福島県が誕生しました。

近代化が徐々に進み、交通網の整備として明治15年(1882)、大町四ツ角を起点とする三方道路の工事が始まります。米沢方面、新潟方面、栃木方面との交通・物流の発展を目的とし、車馬が通行できるよう道幅を広げるなどの大工事、人々の大きな負担を伴いながらも明治17年(1884)に竣工しました。鉄道網の整備も進み、明治32年(1899)、実業家の渋沢栄一の尽力もあり、岩越鉄道株式会社により郡山・若松間が開通しました。大正15年(1926)には、只見線(旧会津線)の若松・会津坂下間が開通し、昭和9年(1934)には会津線の若松・田島間が開通しました。それぞれの路線はその後延長され、現在は新潟方面や東京方面へつながっています。

交通網の整備に伴い、街道沿いでは商家が徐々に復興し、新たに洋風建築物も建てられるなど、街なみも近代化していきました。

明治27年(1894)に若松電灯株式会社、明治33年(1900)に会津電力株式会社が設立され、東山発電所が造られました。明治35年(1902)には、市役所の門などに電灯が灯り、その後、一般家庭にも普及しました。また、明治44年(1911)には、日橋川発電所が竣工し、猪苗代第一発電所が大正3年(1914)に、猪苗代第二発電所が大正7年(1918)に完成し、東京への送電が開始されました。

明治22年(1889)、若松町が誕生し、明治32年(1899)には、福島県で初めて市制が施行され若松市となりました。

明治37年(1904)、日露戦争が始まると、歩兵第六十五連隊が明治41年(1908)に本市に置かれ、大正14年(1925)には歩兵第二十九連隊が本市に移駐しました。

大正時代に入ると、人々の生活に娯楽を楽しむ余裕が生まれ、会津にも芝居や活動写真等の文化が入ってきました。特に七日町通りは、繁華街として賑わいを見せ、現代でも面影が残っている洋風建築が建てられました。

通信網の整備も進み、昭和2年(1927)に県内主要都市と電話線でつながり、昭和8年(1933)には、東京までの直通電話も開通しました。

昭和12年(1937)、市庁舎が新築され、落成記念式も催されました。この建物は、現在も市役所本庁舎として使われています。



市役所本庁舎（中心地区）

終戦を迎え、昭和20年(1945)に神明通りが開通します。昭和28年(1953)には会津まつりが開催され、昭和31年(1956)に背灸山にロープウェイが設置されるなど、観光化が本格化します。昭和32年(1957)、神明通りにアーケードが設置されると、デパートなど商業施設の開店により、神明通りは繁華街となりました。昭和53年(1978)には、会津若松駅と神明通りを結ぶ中央通りが開通しました。



会津まつり（中心地区）

鶴ヶ城（若松城）の整備も行われ、昭和40年(1965)、天守が再建されます。平成2年(1990)には茶室麟閣が本丸に移築され、平成13年(2001)、干飯櫓・南走長屋が復元されました。また、近年の発掘調査により黒瓦と赤瓦が出土し、幕末期に赤瓦が葺かれていたと考えられることから、平成23年(2011)に鶴ヶ城（若松城）の瓦が赤瓦に葺替えられました。



神明通り（中心地区）

市域も周辺市町村との合併により変化していきます。昭和12年(1937)、町北村の一部が若松市に編入され、昭和26年(1951)には町北村の残りも若松市と合併します。昭和30年(1955)には、高野村、大戸村、湊村、一箕村、神指村、門田村、東山村と若松市は合併し、会津若松市が誕生しました。また、同年、本郷町小谷集落とも合併しています。その後、平成16年(2004)に北会津村と、平成17年(2005)に河東町と合併し、現在の市域となりました。



復元された干飯櫓・南走長屋（中心地区）

市は現在、「スマートシティ会津若松」の取り組みを行っています。平成5年(1993)、日本で初めてとなるコンピュータ理工学に特化した会津大学が開学し、それ以降、市は大学との連携を進めてきました。ICTなどを生活の様々な分野で活用し、安心して快適に暮らすことができるまち「スマートシティ会津若松」を目指しています。



会津大学（一箕地区）

一方で明治時代以降も技術を守り、販路拡大に努めるなど成長を遂げてきた会津漆器や会津清酒などの伝統産業、会津野菜など農業の振興にも力を入れており、新しい技術と伝統がともに息づく魅力的なまちづくりを進めています。

(2) 関わりのある人物

以下に本市と関わりのある人物を示します。

①行基【白雉19年(668)～天平勝宝元年(749)】

白雉19年(668)に現在の大阪府堺市である和泉国大鳥郡で生まれ、15歳で出家したのち仏道修行を経て、民間布教や社会貢献に尽力したといわれています。天平年間中(729年～748年)には、3本足の鳥に導かれて東山温泉を発見し、また、羽黒山湯上神社を勧請し、創建したとする伝説が残されています。



行基伝説のある羽黒山湯上神社

②徳一【奈良時代～平安時代前期】

天平勝宝元年(749)の生まれとされる学問僧で、会津地方に仏教を広めました。奈良の興福寺や東大寺で学問を学び、延暦元年(782)に常陸(茨城県)筑波山中禅寺を創建したとされます。

また、大同2年(807)には、会津磐梯山麓に位置する現在の磐梯町に恵日寺を、会津盆地のほぼ中央に位置する現在の湯川村に勝常寺を、只見川沿線に位置する現在の柳津町に圓藏寺を創建したとされます。



恵日寺

(会津若松市立図書館所蔵)

③空也【延喜3年(903)～天禄3年(972)】

康保元年(964)の奥州巡錫中に会津地方にたどり着き、一字を建立しました。浄水不足に悩む村人のため、また、阿弥陀如来に供える闕伽水を得るため、独鉤杵をもって掘り浄水を得たとされます。

八葉寺を創建したとされ、空也の縁日である8月5日には八葉寺空也堂の前で空也念仏踊が開催されます。



空也

④蒲生氏郷【弘治2年(1556)～文禄4年(1595)】

近江国蒲生郡日野に六角承禎の重臣・蒲生賢秀の三男として生まれ、近江日野城主、伊勢松坂城主を務めた後、黒川城主となり、会津に入りました。氏郷は城の大改修に取り掛かり、以後若松城と改めました。また、漆や酒等の職人を近江から会津に招き、産業振興に力を入れ、楽市楽座の政策により商業の発展を図りました。



蒲生氏郷

(会津若松市立図書館所蔵)

⑤千少庵【天文15年(1546)～慶長19年(1614)】

千利休の養子、娘婿であり茶人です。天正19年(1591)豊臣秀吉の逆鱗に触れた千利休が死罪になると、利休七哲の筆頭である蒲生氏郷に保護されました。

少庵は氏郷のために茶室麟閣を建てたともいわれ、会津の茶道文化の振興に寄与しました。また、文禄3年(1594)徳川家康により京に戻ることを許されたのち千家を興し、茶道の発展に寄与しました。



千少庵ゆかりの茶室麟閣

⑥保科正之【慶長16年(1611)～寛文12年(1673)】

会津松平家の初代藩主で信州遠野城主、出羽山形城主を経て、寛永20年(1643)に会津城主となりました。

徳川家光から信頼され、その子、徳川家綱を補佐しました。また、会津藩の憲法ともいべき「家訓十五ヶ条」を制定するなど会津藩の礎を築きました。



保科正之

(会津若松市立図書館所蔵)

⑦田中玄宰【寛延元年(1748)～文化5年(1808)】

会津藩家老で3代の藩主に仕えた名宰相で、34歳で家老となり、天明の改革を提言し、大きな成果をあげました。改革では、漆器業の技術面・品質等の向上を行い、漆器業全体が問屋によって統制される傾向が強まったといわれています。

晩年は藩校である日新館の建設に尽力したとされ遺言には「わが骨は鶴ヶ城と日新館の見えるところに埋めよ」との伝えから、墓は小田山の頂に建てられています。



田中玄宰の墓

(会津若松市立図書館所蔵)

⑧松平容保【天保7年(1836)～明治26年(1893)】

会津藩9代藩主。新設された京都守護職に就任し、尊王攘夷運動が熾烈になった京都の治安維持にあたり、尊王攘夷派志士の弾圧の指揮をとりました。戊辰戦争の際には最後まで討幕軍に抗戦しましたが、鶴ヶ城(若松城)で降伏しました。会津の歴代藩主の別荘として使われた会津松平氏庭園は戊辰戦争後には容保の住まいとなり、昭和7年(1932)に国の名勝にも指定されています。



松平容保

(会津若松市立図書館所蔵)

⑨^{にいしまやえ}新島八重【弘化2年(1845)～昭和7年(1932)】

弘化2年(1845)、新島八重は会津藩の砲術師範であった山本権八・佐久夫妻の子として若松城下で誕生しました。戊辰戦争の籠城戦で、八重は髪を断ち、銃撃戦に参加し抗戦しました。会津藩の敗戦から3年後、京都府へ移ったのち新島襄と結婚し、同志社大学を創立しました。死別後は日本赤十字社の看護婦として日清・日露戦争に従軍しました。



新島八重

(会津若松市立図書館所蔵)

⑩^{やまかわけんじろう}山川健次郎【安政元年(1854)～昭和6年(1931)】

戊辰戦争時には白虎隊士として離脱するまで戦い、戦後は会津藩士で漢学者の秋月悌二郎の尽力により越後に脱走し、留学等を経て東京帝国大学総長になりました。

大正12年(1923)には、飯盛山の参道と墓所が狭かったことから、「鉄道王」と称される根津嘉一郎と協力して表参道を改修しました。



山川健次郎

(会津若松市立図書館所蔵)

⑪^{のぐちひでよ}野口英世【明治9年(1876)～昭和3年(1928)】

細菌学者。現在の猪苗代町に生まれ、1歳のとき、囲炉裏に転落して左手に大火傷を負いました。明治25年(1892)高等小学校生のとき、会津若松市中町の会陽医院で、医師の渡部鼎による手の手術を受け、医学のすばらしさを実感し、薬局生として会陽医院に住み込みながら医学の道を志したといわれています。

会陽医院の建物は、当初、明治17年(1884)に第16銀行として建てられたもので、現在では喫茶店として使用されており、その前の通りは、若き頃の野口英世が過ごしたことにちなみ、「野口英世青春通り」と名付けられています。



野口英世

(会津若松市立図書館所蔵)

4. 文化財等の分布状況

(1) 指定等文化財

各種調査の結果を反映しながら、国では文化財保護法、福島県では県文化財保護条例、本市では市文化財保護条例に基づいて、それぞれ国にとって、福島県にとって、本市にとって重要な文化財が指定されています。

本市には、令和3年(2021)10月時点で、208件の指定・登録文化財があり、そのうち、国による指定が22件、県による指定が24件、市による指定が119件、国による登録が43件となっています。

これらを種別(指定)で見ると、有形文化財の建造物が15件、有形文化財の美術工芸品が71件、有形文化財の書跡・典籍・古文書が12件、有形文化財の歴史・考古資料が23件、無形文化財の工芸技術が1件、民俗文化財の有形の民俗文化財が4件、民俗文化財の無形の民俗文化財が5件、記念物の遺跡が18件、記念物の名勝地が1件、記念物の天然記念物が15件となっており、種別(登録)は有形文化財が42件、記念物が1件となっています。

一方、文化的景観、伝統的建造物群保存地区、選定保存技術に選定されているものはない状況です。

また、周知の埋蔵文化財包蔵地は現在513件登録されており、そのうち、国による指定が4件、県による指定が1件、市による指定が12件となっています。

指定および登録文化財 (単位：件)

種別		国	県	市	合計		
指定 選定	有形文化財	建造物	4	4	7	15	
		美術工芸品	絵画・彫刻・工芸品	9	11	51	71
			書跡・典籍・古文書	0	3	9	12
			考古資料・歴史資料	1	3	19	23
	無形文化財	工芸技術	0	0	1	1	
	民俗文化財	有形の民俗文化財	1	0	3	4	
		無形の民俗文化財	0	1	4	5	
	記念物	遺跡	4	1	13	18	
		名勝地	1	0	0	1	
		動物、植物、地質鉱物	2	1	12	15	
文化的景観		0	—	—	0		
伝統的建造物群		0	—	—	0		
登録	有形文化財	42	—	—	42		
	記念物	1	—	—	1		
総数		65	24	119	208		

※国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財として「冬木沢参りの習俗」及び「会津の初市の習俗」が選択されている。

※遺跡の市指定13件は、埋蔵文化財包蔵地ではないものの史跡として指定された1件を含む。

※制度として存在しないものは表中で「—」として示している。

①国指定文化財

○若松城跡（史跡）

蒲生氏郷により大改修された城郭の構えは壮大で、本丸北西に天守を設け、馬出しを有するなど、東北屈指の城跡です。江戸時代になり、加藤明成の時代に西出丸や北出丸の大改修を行い、現在の姿となりました。現在の天守閣は、昭和40年(1965)に外観を復元し再建したものです。

市民からは鶴ヶ城の愛称でよばれています。



②福島県指定文化財

○茶室麟閣（重要文化財（建造物））

蒲生氏郷が千利休の養子であり次男の少庵をかまくらった際に、少庵が氏郷のために建てたと伝えられます。明治2年(1869)、城内から森川家に移築され、平成元年(1989)に、鶴ヶ城（若松城）本丸に移築、復元されました。



③会津若松市指定文化財

○小松彼岸獅子（無形民俗文化財）

正保2年(1645)に現在の栃木県那須地方から伝わったと言われており、時期や経緯については諸説ありますが、それから370余年にわたりこの地区で受け継がれてきました。戊辰戦争の籠城戦の際、新政府軍に包囲されながらも、この獅子舞を先頭に会津藩士が鶴ヶ城（若松城）内に入城したという逸話が伝えられています。



(2) 指定文化財以外の歴史資源

本市において、既往調査や文献等により把握された指定文化財以外の歴史資源は、令和3年(2021)11月時点で、1,312件に上ります。

種類・分類をみると、遺跡が472件と最も多くなっています。その他、建造物152件、絵画84件、工芸品140件、書跡・典籍・古文書128件、歴史・考古資料204件と、有形文化財が多数を占めています。

指定文化財以外の歴史資源

(単位：件)

種別		主な例	件数
有形文化財	建造物	神社・仏閣・明治時代以降の近代建築等	152
	絵画	会津出身の画人による絵	84
	彫刻	仏像等	5
	工芸品	刀・漆器等	140
	書跡・典籍・古文書	歴史的書物等	128
	考古資料・歴史資料	石碑・絵図面等	204
無形文化財	工芸技術	伝統産業に関する技術	4
民俗文化財	有形の民俗文化財	生活のなかで使用されてきた用具等	1
	無形の民俗文化財	伝統芸能・食・伝統行事等	6
記念物	遺跡	埋蔵文化財包蔵地	472
	名勝地	山・湖等	25
	動物・植物・地質鉱物	樹木・鉱山等	28
文化的景観		古くから残る道路や町並み等、生活に根差した景観	14
その他の歴史資源	生活文化	方言・伝承、人々の伝統的な活動(産業)、交通など	49
総数			1,312

※上記の未指定文化財件数は、市や県で発行した文化財調査報告書、市史、北会津・河東の町村史、埋蔵文化財包蔵地台帳に記載されている歴史資源のなかから、現存し、地域の歴史文化を特徴づけると考えられる歴史資源を集計したものです。

代表的な歴史資源

●会津絵ろうそく

室町時代に蘆名盛信が領内にウルシ樹の栽培を奨励したとされ、漆の果実をろうそくの原料として、ろうそくの生産が盛んになりました。

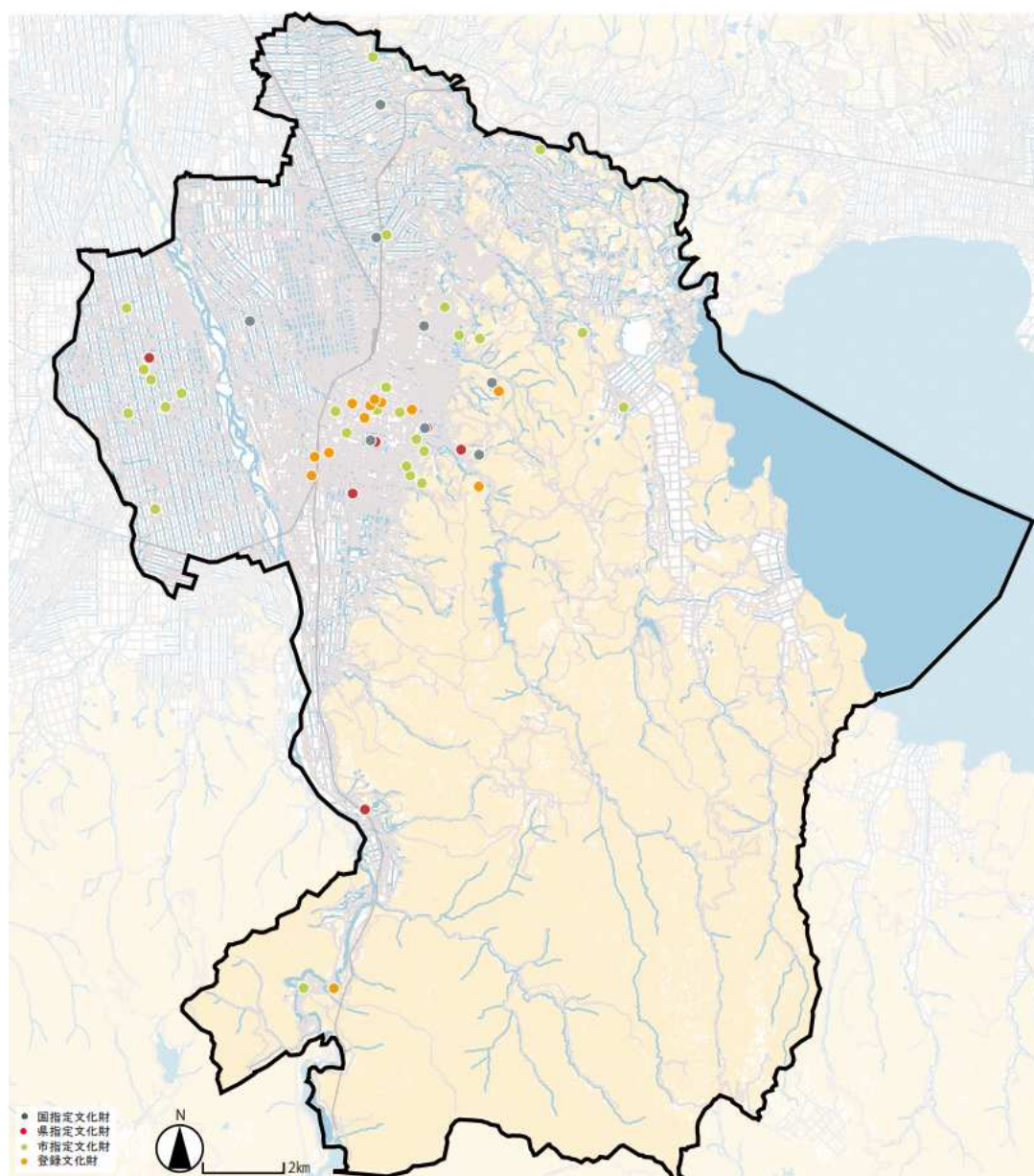
やがて蒲生氏郷がろうそく職人を招いたことで品質が高まり、ろうそくに絵をつけることが考案されると、江戸時代には最高級品として全国で珍重されました。



普通の無地のろうそくは神社に供え、絵ろうそくは仏壇に供えられていました。絵ろうそくは高級品だったこともあり、侍等の一部の人のみが使用していましたが、明治以降は一般の人でも購入するようになりました。かつては、ろうそく屋から完成したろうそくが絵つけ師のもとに送られ絵付けが施されていましたが、現在ではろうそくの製作から絵付けまで絵つけ師が行っています。

昔の絵ろうそくは蠟の原料が漆でしたが、現在はハゼの実を使用しています。また、絵の具が豊富になったことで色彩が一層華やかになりました。

現在では、会津若松市内における絵ろうそくの製作は4店舗で行われており、本市の伝統工芸を大切に守り伝えています。



指定文化財の分布図

(3) 特産品、民芸品、郷土料理

本市をはじめ会津地方の民芸品は、家族繁栄、家内安全を祈り今に伝えられたとされ、現在では、初市などで縁起物として売られています。また、食文化の特徴として、主に儀礼の際に食されるこづゆや、鱧の山椒漬、棒鱈などの郷土料理が挙げられます。また、代々の領主、藩主が力を入れた会津の酒づくりは、今も盛んに行われています。会津藩の時代から盛んに栽培された薬用ニンジン、栽培する農家が少なくなりましたが、今でも栽培は続いています。会津身不知柿は、勢津子妃殿下への献上を機に、今でも皇室に献上されており、会津の秋の味覚であるだけでなく、会津の秋の風景を彩っています。

●会津漆器

会津漆器の歴史は、『新編会津風土記』（文化6年(1809)）によると、「氏家が近江より生地挽5人を連れてきて七日町に屋敷を与え、慶山で生地挽を行った」との記載があり、また、『蒲生家分限帳』（文久元年(1861)）には、お抱え工として塗師の名もみられます。その後、田中玄宰の寛政の改革で会津の漆器業は大きく変わり、技術面、品質等の向上、漆器業全体が問屋によって統制される傾向が高まりました。明治14年(1881)褒章条例が施行され、需要が急増し、木杯を高品質で早く、安く製造する他産地に抜き出た製造形態を完成させていきました。



現在では、従来の伝統的な漆器はもとより、新しい生活様式にも対応できる漆器など、様々な可能性の探求に取り組んでいます。

●会津清酒

会津地方は周囲を山々に囲まれた内陸部に位置し、冬の積雪を伴う寒冷な気候などの自然的環境が酒造りに適しているとされます。また、歴史的には会津藩による酒造の直接経営や、城下、町方における商人などの資産家による経営により発展してきました。



始まりそのものは明確には分かっていませんが、『会津藩家世実記』（文化12年(1815)）に記録があることから、江戸時代には酒造りが行われていたことが分かっています。

明治維新以降は、道路や鉄道が整備されたことで他地方との流通も盛んになり、その後酒造組合の設立や品質の改良を重ね、全国に広く知られるようになりました。

近年の全国新酒鑑評会では、連続で入賞しており、酒造りに携わる人々のたゆまぬ研鑽が続けられています。

現在も、まちなかには造り酒屋が点在しており、歴史的風情を醸し出しています。

●会津のみそ、醤油

会津地方のみそは、会津盆地の厳しい気象条件下でつくられ、赤色辛口の米麴みそという特徴があります。

みそづくりは、以前は各家庭で作られることが主流で、みその仕込みは寒中に3、4日掛けて行われることが多く、ほこりやゴミも少ないこの時期が一番良いとされてきました。また、みそは夏の暑さを嫌うので、仕込み後は大きな樽に入れられ、気温の変化の少ない土蔵などに貯蔵されていました。

一方、醤油づくりは、みそと比較して手間が掛かることもあり、みそもろみのなかから澄んだ汁を「溜り」として用いることが多く、各家庭ではみそづくりほど一般的ではありませんでした。

会津のみそ、醤油づくりの歴史は、『会津風土記』(貞享2年(1685))によると、武士生活用品の手伝い人足の割り当てとして、「御味噌手伝百四十四人、御醤油手伝い人足二十一人」と記載されており、城内のみそ、醤油がつくられていたことを伺い知ることができます。その後、みそ、醤油づくりを生業とする者が現れ、嘉永5年(1852)に発行された『若松禄高名五副対』にも挙げられていることから、会津におけるみそ、醤油づくりは江戸時代に始まり、幕末までには製造が盛んになり、現代まで受け継がれてきたと考えられています。



●会津木綿^{もめん}

会津で綿花栽培が始まったのは寛永4年(1627)、会津藩主加藤嘉明が入部したときに、伊予松山(愛媛県)から織師を招いて会津に伝習したのが、会津木綿の起こりであるといわれています。その後、会津藩主保科正之が綿花の栽培を奨励してから、会津に定着し、発展してきました。

明治初めまでは、会津の各地の農家で自家用として綿花栽培は行われ、会津は綿花栽培の北限地ともいわれてきました。明治10年代(1877~)には、外国から綿花の輸入が急増し、その影響を受け、大正時代になると綿花栽培は姿を消してしまいました。

しかし、昭和12年(1937)に始まった日中戦争の長期化に伴い衣料品が不足するようになり、再度、綿花栽培は行われるようになりましたが、特需景気以後になると綿花栽培は姿を消してしまいました。

会津木綿は無地織や経縞^{たてしま}、格子縞^{こうししま}が多いのが特徴であり、丈夫で農作業の仕事着用として用いられてきました。今日では素材としての純綿を守り、縞柄に改良を加え民芸織物とし、着尺地、洋服地など様々な用途に用いられています。

最盛期の正末期には30数社あった機織り場も、現在は2社のみとなりました。



●起きあがり小法師こぼうし

織田信長が岐阜城を7回攻めて失敗し、8回目で成功したことにより起き上がりダルマが誕生し、その家臣であった蒲生氏郷が起き上がり小法師として伝えたともいわれています。

起きあがり小法師は和紙の張り子細工で作られ、赤く塗るのはダルマに由来するとともに、魔よけを意味するともいわれています。

毎年、初市である十日市で売り出され、家族の数より1個多く買う習わしとなっており、家族繁栄と家内安全を祈願するもので、風車、初音と同様に三大縁起物の一つとされています。



●風車かざぐるま

風車の中心を豆で留めてありますが、まめで元気に一年中過ごせるようにとの意味があります。起きあがり小法師、初音と同様、三大縁起物の一つとされます。



●初音はつね

鶯の声を表す笛で、春一番に鳴く鳥で縁起がよいといわれ、毎年元日の朝になると「はつね、はつねー」とこの笛を吹きながら売り歩いていました。会津では初音は竹製のうぐいす笛のことを指し、福を呼ぶ縁起物として、元日に各家庭で買われたものです。起きあがり小法師、会津風車と同様、三大縁起物の一つとされます。



●赤べこ

赤べこは会津地方を代表する張子の玩具で、厄除け、商売繁盛の縁起物とされます。慶長16年(1611)に発生した会津地震で、現在の柳津町にある圓藏寺えんざうじの虚空蔵尊こくうざうの堂宇が倒壊し、再建の際、只見川から材木を運んだ赤牛にちなんで作られたといわれています。また、会津地方で悪性の疫病が流行った際、赤べこを持った子供が病を逃れたことから、後にお守りとして普及した、ともいわれています。

今も木型に和紙を幾重にも貼る昔ながらの技法で製造されています。



●桐製品

会津地方は桐の産地であり、昔から「女の子が生まれたら桐の木を植えよ」という言い伝えがあります。桐の成長は早く、生まれた女の子が嫁入りするときには、その桐は伐採可能となり、嫁入りたんすや嫁入り支度が出来るからといわれています。

会津桐は、材質が緻密で粘りと光沢があり、材色が白銀色で、年輪がはっきりとしている特色を生かして、下駄、たんす、琴などが作られてきました。

近年では、伝統的な桐製品の他、新しい製品も作られるようになりました。



●^{にしん}鱧の山椒漬^{さんしやうづ}

会津地方は山国であるため、口にする魚は川魚に限られていました。会津藩は文化4年（1807）より樺太警備を命じられ、北海道の知床半島にある士別の地に陣屋が建てられました。これにより、西回り航路により、北海道でとれる鱈、^{たら}鱧、^{にしん}貝柱などの乾物が帰りの荷として運ばれ、新潟の港から船で会津地方に入るようになりました。山椒の葉と鱧を交互に入れ、酢、しょうゆ、みりんを煮立てて冷ましたタレを入れます。1週間から10日位漬け込み、肴にしました。



会津藩松平家の記録である『家政実記』(文化12年(1815))によると、4代藩主松平容貞の就封祝いに鱧の山椒漬が出されたことが記されています。

●こづゆ

会津地方の慶弔の席には欠かせない料理です。各家によって中身は異なりますが、貝柱、里芋、^{きくらげ}木耳、薄切りの干し椎茸、糸こんにゃく、^{まめこ}豆麩（会津地方独特の豆つぶ状の焼麩）は必ず入ります。季節によって、絹さや、ほうれん草、みつ葉をかざります。慶事にはニンジン、仏事にはワラビを入れ、区別する場合もあります。



宴会の際、座敷中央に「大平」という直径一尺（約30cm）以上の椀に入れて出され、こづゆ椀と呼ばれる直径11cmほどのごく浅い椀に取り分けます。お客様は何杯お代わりしてもよいとされました。

宝暦年間（1751～1764）の婚礼の献立書にも記載されています。

●^{ぼうたら}棒鱈

真鱈を棒のように硬く干した干鱈を言います。師走には魚屋の軒先に新巻鮭と共に棹掛けされ並ぶ景色が以前は多くみられました。一匹丸ごとを一抱え、半身を半抱えといい、井戸水などにつけて水を換えながら、一週間ほどかけて戻します。柔らかくなったら、切り分けて、下茹でし、酒、みりん、醤油で飴色になるまで煮るので、骨も柔らかく食べられます。京都や山形にも同様のものがあります。



●会津みしらず柿

会津特産の渋柿で、焼酎でさわした（渋抜きした）のちに食します。「身不知」とも表記されるその名の由来は、柿の枝が折れるほど身の程を知らずに実をつけるとも、そのおいしさに我が身（自分のおなか）を考えずに食べ過ぎてしまうことから、この名が付けられたとも、徳川将軍家に献上したところ、「未だこのような美味を知らず」と称賛されたからともいわれています。現在では、皇室献上柿となっています。



(4) 日本遺産への認定

会津 17 市町村の連名により文化庁に申請した「会津の三十三観音めぐり～巡礼を通して観た往時の会津の文化～」は平成 28 年(2016)に「日本遺産」に認定されました。

磐梯山信仰を取り込み東北地方で最も早く仏教文化が花開いた会津は、今も平安初期から中世、近世の仏像や寺院が多く残り「仏都会津」とよばれます。そのなかでも西国三十三所巡礼をもとにした三十三観音巡りは、古来のおおらかな信仰の姿を今に残し、広く会津の人々に親しまれています。

会津藩祖である保科正之^{ほしなまさゆき}が定めた会津三十三観音巡りは広く領民に受け入れられ、のちに様々な三十三観音がつくられました。会津の三十三観音は、国宝を蔵する寺院から山中に佇むひなびた石仏まで、点在してその姿をとどめており、これら三十三観音を巡った道を、道中の宿場や門前町で一服しながらたどることで、往時の会津の人々のおおらかな信仰と娯楽を追体験することができます。

複数の市町村にまたがってストーリーが展開している「シリアル型」であり、以下の市町村が申請者となっています。※会津若松市では9箇所が該当

申請者：会津地方 17 市町村

(会津若松市・喜多方市・南会津町・下郷町・檜枝岐村・只見町・北塩原村・西会津町・磐梯町・猪苗代町・会津坂下町・湯川村・柳津町・会津美里町・三島町・金山町・昭和村)